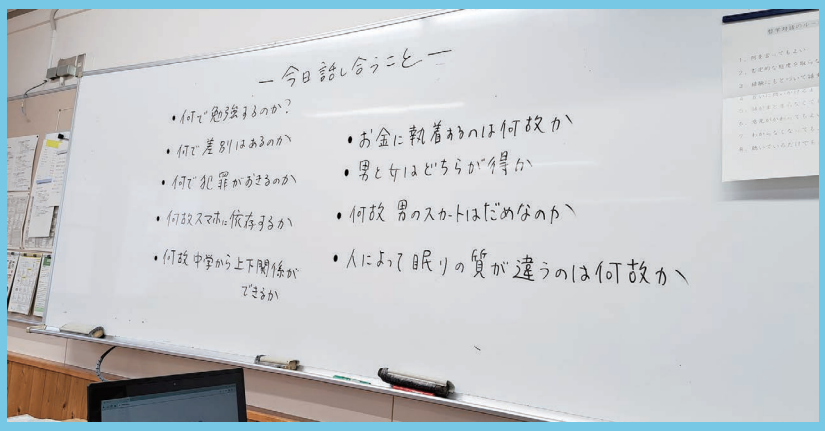
未来を創る子供たちの育成に向けて

埼玉教育

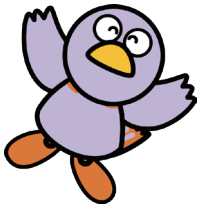
第4号
令和６年２月
No.824

特集
① 現代的な諸課題に対応するために
② 地域と連携・協働した教育の推進



定時制高校におけるキャリア教育
～哲学対話の授業実践～

県立狭山緑陽高等学校　教諭　小澤（おざわ）　貴也（たかや）


[コバトン]

埼玉県立総合教育センター

[さいたまっち]

埼玉県教育局　障害者雇用促進に向けたモデル事業

「チームぴかぴか」を紹介します

「チームぴかぴか」とは、一般企業への就職を目指す特別支援学校卒業生や離職した障害者の方を、県教育委員会が会計年度任用職員として雇用し、県の各部署から受注した業務に取り組む中で職業スキルの向上を図り、一年間のうちに企業への就職を目指す取組です。また、特別支援学校等の在校生の学びの場としての実習を受け入れ、学んだことを自身や学校に還元していきます。

「チームぴかぴか」の歴史

平成 26 年度に埼玉県庁内に「チームぴかぴか」を開設しました。その後、埼玉県北部地域のニーズに応えるために、平成　28　年度から北部拠点（埼玉県立総合教育センター内）を新設しました。今までに、125 名の方が就職していきました。

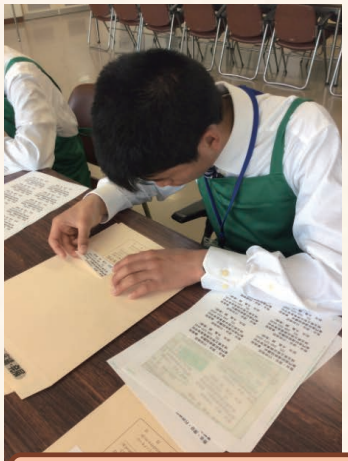
「チームぴかぴか」の特徴

「チームぴかぴか」の仕事は、以下の三つを生み出します。

・メンバーは毎日「ぴかぴか」の笑顔で仕事に取り組みます。

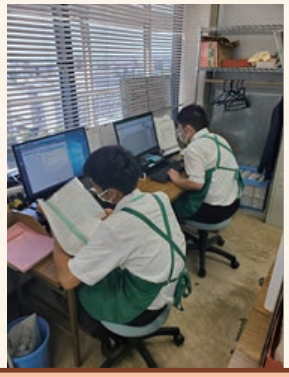
・メンバーの仕事を通じて、たくさんの方が明るく「ぴかぴか」の笑顔になります。

・メンバーの清掃などの仕事を通じて、職場を「ぴかぴか」にします。



文書の宛名ラベル貼り　や　郵便物の配達

総合教育センター敷地内の除草



パソコン作業

高校での出張業務

企業におけるスキルアップ研修

「チームぴかぴか」は、これらの活動の他に、障害者雇用の理解を広げるために保護者や企業担当者、教員を対象に見学を受け入れています。

その他にも様々な業務（アンケート集計、廃棄文書からのクリップ等の除去、ゴム印押し等）を承っております。皆様から依頼していただく仕事により、メンバーのスキルが高まり、企業等への就職につながっております。仕事の依頼をお待ちしています。

令和５年度「埼玉教育」第４号（冬号）　目次

目次		1
巻頭言		
新しい学習評価の在り方 ～新３観点をどう捉え評価するか～	京都大学大学院　准教授　石井　英真	2
教育法規・教育情報		
次代を担う教員の養成・育成について ～教育学部生の現状から考察する教育実習の在り方について～	埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター　教授　浅海　純一	4
県教委・施策事業の紹介		
地域と連携・協働した教育を目指して	教育局　市町村支援部　生涯学習推進課　地域連携担当　藤村敬一郎	6
人間関係づくりプログラムを活用したよりよい集団の育成を目指して	県立加須げんきプラザ　担当課長　井野　裕治	8
新設校紹介		
はるかぜと、ともに　～岩槻はるかぜ特別支援学校が開校しました～	県立岩槻はるかぜ特別支援学校　校長　神田　佳明	10
特集①現代的な諸課題に対応するために		
ICT 活用による学校教育の改善	鴻巣市立吹上小学校　校長　清水　励	12
「信じてゆだねる」国語授業 ～「自分らしく学ぶこと」と「あなたらしく学ぶことを受け入れること」の往還～	埼玉大学教育学部附属小学校　主幹教諭　吉野　竜一	16
生徒の心に種をまく　～「読めない」から「読みたい」へかえる試み～	県立妻沼高等学校　司書　長沼　祥子	18
指導力向上のための実践論文		
定時制高校におけるキャリア教育　～哲学対話の授業実践～	県立狭山緑陽高等学校　教諭　小澤　貴也	20
これからの AI 時代におけるプログラミング教育	県立北本高等学校　教諭　坪井　啓明	22
学校における消費者教育の現状と課題 ～ 18歳で大人になるまでに生徒が必要な知識や経験を身に付けるために～	県立浦和商業高等学校　教諭 埼玉県消費生活支援センター　長期研修生　青木由紀子	24
特集②地域と連携・協働した教育の推進		
「ひらこう！　ちちこう！」で始めた地域にひらく探究活動の歩み ～本校の地域探究の取組についての活動報告～	県立秩父高等学校　教諭　田中　里奈	26
地域との協働で生きる力を育む　～越生高校「９限目の教室」プロジェクト～	県立越生高等学校　教諭　堀江　寛将	28
地域が関わる９限目の教室 ～一人の生徒を応援することから始まった学校との関わり。 手を動かす、足を動かす、身体を動かす、心が動く。～	県立越生高等学校　地域コーディネーター　岡野　正一	29
教頭間連携で取り組む県立高等学校の魅力発信 ～ ICT を活用した「熊谷モデル」による生徒募集の実践～	県立熊谷女子高等学校　教頭　松下奈緒子	30
指導力向上のための実践論文		
「達成感の積み重ねで育む 自己肯定感」　～専門性に基づく構音訓練を通して～	宮代町立百間小学校　教諭　染谷美弥子	32
１人１台端末の効果的な活用を目指して	蕨市立中央東小学校　教諭　譜久村淑恵	34
総合的な探究の時間を活用した社会課題の解決 ～肢体不自由者にとって快適な働く服を探究しよう～	県立熊谷特別支援学校　教諭　大島　啓輔	36
教職員からのメッセージ		
教師生活を振り返って　～これまでの経験から、次に繋げたいこと～	杉戸町立西幼稚園　教諭　岡安　悟	38
子供たちの笑顔輝くプロジェクト型学習と 英語運用能力を伸ばす授業の実践を目指して	草加市立花栗中学校　教諭　大瀧　優作	39
管理職の魅力発信		
出会いを大切に学び続ける	ふじみ野市立大井小学校　校長　抜井由美子	40
教育長からのメッセージ		
世界に冠たる埼玉教育を目指して　～第４期教育振興基本計画に期待を寄せて～	戸田市教育委員会　教育長　戸ヶ崎　勤	41
我がまち、こんなまち		
さらなる選ばれるまちを目指して	川口市市長室広報課　シティプロモーション担当　主任　齊藤　貴聖	42
子供たちに伝えたい埼玉の偉人		
伯元・察元・烈元　～江戸時代に囲碁の本因坊を３人も生んだ幸手～	幸手市郷土資料館　館長（学芸員）　原　太平	43
校外学習施設紹介		
子供から大人まで科学を学べる！　楽しめる!! 科学技術体験センター　（ミラクル）	越谷市教育委員会　生涯学習課　主幹　武田　純一	44
シリーズ　改訂版生徒指導提要		
第４回　児童生徒の自殺を防ぐ　～誰一人取り残さない生徒指導に向けて～	県立総合教育センター　指導相談担当　主任指導主事　中川こずえ	45
教育用語解説／電話・メール相談の現場から		
教育用語解説「農福連携等」 電話・メール相談の現場から　～保護者支援について～	県立総合教育センター　農業教育・環境教育推進担当 県立総合教育センター　指導相談担当	46
コラム		
私の原点	久喜市立東鷲宮小学校　校長　獨古　芳雄	47
教職員相談道しるべ／編集後記		
教職員相談道しるべ 編集後記	県立総合教育センター　教職員研修担当　専門指導員　戸坂　和明 県立総合教育センター　企画調整「埼玉教育」担当	48

表紙	定時制高校におけるキャリア教育　～哲学対話の授業実践～	県立狭山緑陽高等学校　教諭　小澤　貴也
表紙見返し	埼玉県教育局　障害者雇用促進に向けたモデル事業 「チームぴかぴか」を紹介します	教育局　県立学校部　特別支援教育課　指導主事　伊藤　岳仁
裏表紙見返し	わーい！　かまきり！	小鹿野町立長若小学校　第１学年　日野谷　祐
	青空とふみきり	行田市立長野中学校　第３学年　瀧澤　有加
裏表紙	奇跡	北本市立宮内中学校　第３学年　保坂　慧亜

新しい学習評価の在り方
～新３観点をどう捉え評価するか～

【プロフィール】
京都大学大学院教育学研究科准教授、博士（教育学）。専門は教育方法学（学力論）。文部科学省「児童生徒の学習評価に関するワーキンググループ」委員など。著書に『未来の学校―ポスト・コロナの公教育のリデザイン』（日本標準）、『授業づくりの深め方』（ミネルヴァ書房）、『中学校・高等学校　授業が変わる学習評価深化論』（図書文化）など多数。

京都大学大学院　准教授　石井（いしい）　英真（てるまさ）

１　新しい観点別評価のポイント

評価の観点が３観点になったこと、特に「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法に注目が集まりがちであるが、評価観や学力観の変化をふまえなければ、評価疲れや、授業と学びの改善につながらない評価になりかねない。

まず、総括的評価（最終的な学習成果の判定（評定））と形成的評価（指導を改善し子供を伸ばすために行われる見取り）とを区別することが重要である。観点別評価や指導と評価の一体化を意識すればするほど、授業中のプロセスを丁寧に観察して記録する作業が肥大化し、「指導の評価化・評定化」とも言うべき状況になりがちである。確かに、思考力・判断力・表現力を伸ばすために授業過程での子供たちの活動やコミュニケーションを丁寧に見守り観察することは重要だが、それは形成的評価として意識すべきものである。総括的評価の材料なら、子供一人一人について、根拠を残しながら客観的に評価することが求められるが、形成的評価なら、指導の改善につながる程度のゆるさで、ポイントになる子供のみを机間指導でチェックしたり、子供たちとやり取りしたりすることを通して、子供たちの理解状況や没入度合などを直観的に把握することで十分である。

このように、形成的評価と総括的評価を区別し、記録を残す総括的評価のタイミングを重点化することで、評価に関わる負担を軽減することができる。そして、記録に残す評価のタイミングを絞る上でも、目標を明確化することが必要であり、出口の子供の姿で目標を具体的にイメージできていれば、子供たちのつまずきや成長がキャッチしやすくなり、自ずと形成的評価が促される。「指導と評価の一体化」の前に「目標と評価の一体化」が重要である。

日々の授業での形成的評価は、子供を伸ばすことに集中する。そして、伸ばし切ったところで力を試す総括的評価の場面を、単元末や学期の節目で重点的に設定することが必要である。新３観点による評価のあり方について、「知識・技能」において、事実的で断片的な知識の暗記再生だけでなく概念理解を重視すること、「主体的に学習に取り組む態度」を授業態度ではなくメタ認知的な自己調整として捉え直し、知識・技能や思考・判断・表現と切り離さずに評価することなどが強調されている。全ての観点で、思考・判断・表現的な側面が強まったように見えるが、そこで目指されている学力像を捉え、評価方法へと具体化していく上で、学力の三層構造を念頭において考えてみるとよい。

教科の学力の質は下記の三つのレベルで捉えることができる。個別の知識・技能の習得状況を問う「知っている・できる」レベル（例：三権分立の三権を答えられる）であれば、穴埋め問題や選択式の問題など、客観テストで評価できる。しかし、概念の意味理解を問う「わかる」レベル（例：三権分立が確立していない場合、どのような問題が生じるのかを説明できる）については、知識同士のつながりとイメージが大事で、ある概念について例を挙げて説明することを求めたり、頭の中の構造やイメージを、絵やマインドマップに表現させてみたり、適用問題を解かせたりするような機会がないと判断できない。さらに、実生活・実社会の文脈における知識・技能の総合的な活用力を問う「使える」レベル（例：三権分立という観点から見たときに、自国や他国の状況を解釈し問題点などを指摘できる）は、実際にやらせてみないと評価できない。そうして実際に思考を伴う実践をやらせてみてそれができる力（実力）を評価するのが、パフォーマンス評価である。社会に開かれた教育課程や資質・能力ベースをうたう新学習指導要領が目指すのは、「真正の学び（authentic learning）」（学校外や将来の生活で遭遇する本物の、あるいは本物のエッセンスを保持した活動）を通じて「使える」レベルの知識とスキルと情意を一体的に育成することなのである。

従来の観点別評価では、「知識・理解」「技能」について、断片的知識（「知っている・できる」レベル）を穴埋めや選択式などの客観テストで問い、「思考・判断・表現」については、主に概念の意味理解（「わかる」レベル）を適用問題や短めの記述式の問題で問うようなテストが作成される一方で、「関心・意欲・態度」については、子供たちのやる気を見るノートや提出物等を基に評価されていたように思われる。新しい観点別評価では、「知識・技能」について、理解を伴って中心概念を習得することを重視して、「知っている・できる」レベルのみならず「わかる」レベルも含むようテスト問題を工夫することが、そして、「思考・判断・表現」については、「わかる」レベルの思考を問う問題に加え、全国学力・学習状況調査の「活用」問題の

ように、「使える」レベルの思考を意識した記述式問題を盛り込んでいくこと、また、後述するように、「主体的に学習に取り組む態度」も併せて評価できるような、問いと答えの間の長い思考を試す、テスト以外の課題を工夫することが求められる。

２ 「主体的に学習に取り組む態度」を「思考・判断・表現」と一体的にどう評価するか

「主体的に学習に取り組む態度」について、文科省「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」(以下、「報告」）では、「単に継続的な行動や積極的な発言等を行うなど、性格や行動面の傾向を評価するということではなく、… 知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価することが重要である」とされている。そして①粘り強い取組を行おうとする側面と、②粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面の２側面で捉えられるとされる。

情意の中身を考える際には、学習を支える「入口の情意」(興味･関心･意欲など）と学習を方向付ける「出口の情意」(知的態度､思考の習慣､市民としての倫理･価値観など）とを区別する必要がある。授業態度などの入口の情意は、授業の前提条件として、教材の工夫や教師の働きかけで喚起するものであり、授業の目標として掲げ意識的に評価するものというよりは、授業過程で、学び手の表情や教室の空気から感じるものも含めて、授業の進め方を調整する手がかりとなるものである。他方､一言一言の言葉へのこだわり(国語科)、物事を多面的･多角的に捉えようとする態度（社会科）や、条件を変えて考えてみたらどうなるかと発展的に問いを立てようとする態度（数学科）など、教科の中身に即して形成される態度や行動の変容は、「出口の情意」であり、知識や考える力とともに意識的に指導することで育んでいける教科の目標として位置付けうるものである。

「主体的に学習に取り組む態度」については、単に継続的なやる気（側面①）を認め励ますだけでなく、各教科の見方・考え方を働かせて、その教科として意味ある学びへの向かい方（側面②）ができているかどうかという、「出口の情意」を評価していく方向性が見て取れる。「報告」では、「主体的に学習に取り組む態度」のみを単体で取り出して評価することは適切でないとされており、「思考力・判断力・表現力」などと一体的に評価していく方針が示されている。例えば、問いと答えの間が長く試行錯誤の機会があるパフォーマンス課題（思考のみならず、粘り強く考える意欲や根拠に基づいて考えようとする知的態度なども自ずと要求される）を設計し、その過程と成果物を通して、「思考･判断･表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の両方を評価するわけである。

美術・技術系や探究的な学びの評価でしばしばなされるように、その時点でうまくできたり結果を残せたりした部分とともに、そこに至る試行錯誤の過程で見せた粘り、工夫、あるいは筋（センス）のよさにその子の伸び代を見出し、評価するという具合である。国語でも作文の評価で、結果として言語化された文章のうまさだけでなく､振り返りの記述（子供の自己評価･自己申告)､あるいは､書いては消しした痕跡などから、試行錯誤や工夫を捉えたり、言葉にこだわる態度の育ちなどを捉えたりするわけである。スマートで結果につながりやすい学び方をする子だけでなく、結果にすぐにはつながらなくても、泥臭く誠実に熟考する子も含めて､教科として意味ある学びへの向かい方として、主に加点的に評価していく必要があるだろう。さらに、単元の学びの先に社会への関心が広がったり、現代社会や自分の生活とのつながりを意識したり、問いが生まれたりすることも､育て評価しているとよいだろう。

最近の教科書には、単元を貫く問いや課題が明示されたりと、単元末など折に触れて、パフォーマンス課題的なものも盛り込まれていたりする。たとえば、学校案内用のキャッチコピーを考える国語科の課題について、キャッチコピー、プレゼンテーション用の説明文、パフォーマンス課題への取組の様子やその振り返りなどを材料に評価することとし、文の組み立てや言葉選びや表現技巧といったキャッチコピー自体の質を「思考・判断・表現」の観点で捉え、その作成過程での試行錯誤や表現を練り上げようとする姿勢を「主体的に学習に取り組む態度」の観点で捉える。模擬裁判というシミュレーション的な活動について、活動主義的に論破するスキルを磨くことではなく、裁判という営みへの理解の深さや、対立する主張を法に基づいて衡平に整理･判断して結論が導出されているか（思考･判断・表現）を、作成された判決文から読み取る。さらに、判決文を作成する過程で迷ったことや大事にしたことなどの振り返りを添えることで、試行錯誤や工夫、あるいは、法的な思考のベースにある、互いの権利や価値観を尊重する寛容の精神の育ちを、主体的に学習に取り組む態度として評価するわけである。たとえば部活動で、子どもたちを伸ばすために、折に触れて大きめの試合（学びの節目となる舞台）を設定してそこに向けて力を高めていくように、単元を意識した授業づくりが重要である。

(参考文献)
石井英真『中学校・高等学校　授業が変わる学習評価深化論』図書文化、2023 年。

次代を担う教員の養成・育成について
～教育学部生の現状から考察する教育実習の在り方について～

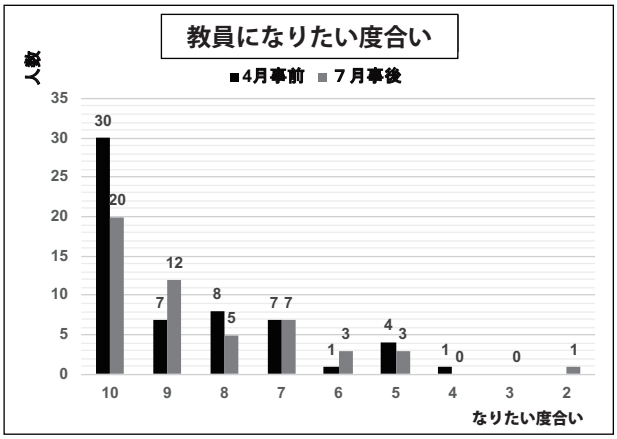
【プロフィール】
1985 年埼玉県立高校社会科教諭として教員スタート。その後２校の県立高校に勤務。2003 年埼玉県教育局指導課指導主事、2007 年県立高校教頭に着任し２校経験。2012 年政策研究大学院大学公共政策専攻教育政策プログラム修了、2013 年埼玉県教育局高校教育指導課主幹兼主任指導主事、2014 年県立寄居城北高校長着任、2016 年埼玉県教育局高校教育指導課教育指導幹、2017 年より県立高校長を２校経験（秩父高校、熊谷女子高校）、2022 年３月退職。2022 年４月より現職。

埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター　教授　浅海（あさうみ）　純一（じゅんいち）

1　教員志望の現状

2022 年４月、私は埼玉大学で教育学部１年生を対象に「教職入門Ⅰ」を担当することとなり、今年度も私を含めた小・中・高・特別支援学校で経験を積んだ実務家教員６名が、約 400 名の１年生を６クラスに分けて担当している。私が主担当となっている学生は、教員養成課程中学校コース及び養護教諭養成課程の 58 名であるが、彼らに対して、年度当初の１回目と 15 回の講義終了後に「教員になりたい度合いを０～10 で答えよ」という意識調査を行った。

最初の調査では「とてもなりたい」10 が 30 名（51.7％）、９が７名（12.1％）、８が８名（13.4％）であり、８割近く（77.6％）が強い希望を持っていた。



しかし、15 回の講義が終了すると、その割合が 71.2% に減少し、さらに、他のクラスを見ると、教員志望の傾向にはかなりの違いがあり、「なりたい度合い」０の回答も散見されている。

本学の教員養成に対する県内の学校からの期待は大きいものがあるが、文部科学省が公表している国立の教員養成大学の「令和４年３月卒業者の大学別教員就職状況」を見ると、埼玉大学は 50.7％（平均は 60.1％）と高い数字ではなく、本学としても教員志願者及び教員就職者の増加は大きな課題である。

2　教員のやりがいとは

先述した「教職入門Ⅰ」において、私は全ての１年生に「教職をめぐる課題」というテーマで授業をしており、大学入学当初から学生たちに学校現場における課題を提起しなくてはならないシビアな立場である。私がこの２年間、当該講座や他学年への授業を行い学生と接しているうちに「教員の大変さを凌駕する教員のやりがい」を彼らに理解してもらいたいと強く思うようになった。

私は、この授業の中で、次の二つのテーマについて４～５人でのグループワークを行った。

(1) 学校における現在の課題と思われることや、皆さんが教員になる際に不安と感じていることを話し合いなさい。

(2) 皆さんが思う「教員のやりがい」とは何かを話し合いなさい。

まず、(1) については、全クラスで 80 グループに議論をしてもらい、一つの班が一つの結論を出し発表してもらった。発表で最も多かったのが「長時間勤務、時間外勤務」で 17 グループ、続いて「保護者への対応」が８、「いじめ」「不登校」「部活動顧問」「校則」が各４、「教員不足」「多様な子供たちへの対応」が各３、「ジェンダー問題」「学校統廃合」「施設の老朽化」が各２という結果であった。

(2) については、47 グループが、教員のやりがいを「子供たちの成長に関われること」（または類似した表現を含む）と回答した。また、「感謝」「笑顔」「卒業後」などのキーワードも多く見受けられた。

これらの意見は、学生がこれまでの学校生活において接してきた教員たちを見ている中で抱いたイメージであると推察できる。

上記１で紹介した１年生に対するアンケートでは、教員になりたい度合いが事前から事後にかけて低下している状況であったが、事後アンケートの自由記述を見ると、

- 教師という職業は、やりがいがあって楽しそうと感じるようになった。
- 教職は大変な仕事だという認識が具体化された上にやりがいの多さも感じるようになった。

他にもこれに類する記述が多数あり、漠然としていた教員のイメージが、学校の実情を把握した上で、教員の使命ややりがいを自分事として捉えられるようになったと考えられる。

3　教育実習に対する学生の想い
―学部４年生へのアンケートから―

大学における教員養成については、学校現場との更なる連携を図りながら取り組んでいく必要があると考える。

ここでは、教育実習を経験した学生たちの声を紹介したい。本教育学部では、教職志望の学生が履修する教職キャリア科目の一つとして、４年生第１ターム（４月～７月）に「教師力向上ケーススタディ演習Ⅰ」を履修する。私はこの授業（履修者 83 名）の中で、次のアンケートを実施した。

【質問】

(1)「これまでの教育実習が教員を目指すあなたにどのような影響を与えたか」

回答者 75 人のうち「よい影響を与えた」は　91％(68 名)、悪い影響を与えた４％（３名)、回答なし５％（４名）であった。

(2)「それはいつの時期か」

(本教育学部では複数回の教育実習を実施している)

○３年次の教育実習　83.1％（59 名／ 71 名）

※「悪い影響」と回答した３名も３年次であるが、３名とも実習後も教員志望には変化はなかった。

○時期の特定なし　20.6％（14 名／ 68 名）

(3)「その理由はどのようなものか」

回答の概要としては、教員の忙しさを実感しつつも、周囲の先生からのサポートを受けながら、子供と接することから生まれるやりがいを感じられたという受け止め方が多かった。

＜以下、代表的なコメントを抜粋して紹介する＞

・想像以上に教員が忙しいことを知ったが、それを上回る子供との関わりの楽しさや、やりがいを感じた。（類似した回答３名）

・教員に対して悪いイメージを持っていたが、実際の様子を見て良い部分もあり、また、悪い部分も何とかなるのではないかという漠然とした考えを持てるようになった。（類似した回答２名）

・指導教員の先生はもちろん、学年・教科の枠を超えて、たくさんの先生がアドバイスをくださった。（類似した回答４名）

・教材研究の重要性、生徒指導、特別支援教育等、大学で学んだ理論や原理が実践として生かされている感覚だった。（類似した回答５名）

・思ったより先生方の退勤時間が早かったり、休みを取れたりしていた。

【悪影響と回答した学生】

・教師同士や上下関係の様子を知り、働きやすい環境ではないのかもしれないと不安を感じた。しかし、教えることのやりがいを感じたため教員志望に変わりはない。

・指導教諭から急な指示がいろいろ続き、精神的に追い込まれてしまった。しかし、子供たちに寄り添いたいという気持ちは強まった。

4　早い段階からの現場経験

上記３で紹介したのは、教員になる意志を確定させた学生たちの事例であるが、上記１で紹介したように学部１年生から４年間の様々な学びや情報に触れる中で、教員志望が揺らぐ学生も少なからず存在する。そこで、大学としては理論や原理を学修しつつも、学生たちがいわゆる「頭でっかち」にならないように、実践の重要性を改めて感じているところである。

教職に関する“理論と実践の往還”を早い段階から実現させるために、「教職入門Ⅰ」では、コロナ禍以前に実施していた「学校参観」を昨年度から復活させた。近隣の小中学校を訪問し、教育活動全般を見学させていただく取組である。この取組が、夏季休業中で希望参加制のため、全体の３分の１程度の参加ではあるが、教員目線で学校現場に触れる初めての機会として、学生たちからも好評の取組となっている。

さらに、２年生からは教職キャリアの選択科目として「学校フィールドスタディ」が設定されている。教育実習では経験できない教科を越えた教育活動全般を一定期間学ぶことで、単位として認める制度である。

5　教育実習校へのお願い

私の所属している教育実践総合センターの紀要 No.20（2022）には、研究論文として「今後の教育学部における教職支援の在り方Ⅲ―教職実践演習の振り返り調査データからの一考察―」がある。その中では、「１年入学時のモチベーションが低かった類型Ｃ（教員になりたい気持ちが５～０）の学生の中には、教育実習における成功体験を通して教職の魅力を感じて進路を考え直した者も数人いることが明らかになった」「自分の適性について不安を抱いていた学生が、教育実習で充実感が得られず、教職を諦める契機となった事例も存在する」との結論を導いている。

校務多忙な中で、教育実習を受け入れていただく学校現場の先生方には、これまでも多大な御理解と御協力をいただいているところであるが、教職を目指す若者たちが、子供たちの未来を預けられる人材としてしっかり育っていくためには、「教員の大変さを凌駕する教員のやりがい」を意識できる環境を設けていただきたいと強く願う次第である。実習生を「お客様扱い」する必要は全くなく、緊張感を持たせることは欠かせないことである。しかしながら、「厳しく鍛えてやろう」という気持ちは、少しトーンダウンしていただき、実習生たちの心の揺れを理解して、「見守り、寄り添い、背中を押す」という姿勢で、対応していただければありがたい。そして、次代の埼玉の教育を担う貴重な人材を、小・中・高・特別支援学校と大学が連携して育成してまいりたいと考える。

地域と連携・協働した教育を目指して

教育局　市町村支援部　生涯学習推進課　地域連携担当　藤村（ふじむら）　敬一郎（けいいちろう）

1　はじめに

近年、急激な少子高齢化やグローバル化の進行等に伴い、激しく社会環境が変化している。地域においては、地域社会のつながり、支え合いの希薄化により、地域の教育力の低下や家庭の孤立化などが指摘されている。学校においては、いじめや不登校などをはじめ、子供を取り巻く課題が複雑化・困難化してきている。新しい時代を切り開いていく未来を担う子供の育成とともに、様々な課題への対応や解決に向けて地域と学校が共に力を合わせ、連携・協働していく組織的・継続的な仕組みが求められている。

2　地域学校協働活動の推進

平成27年12月の中央教育審議会答申や平成28年１月の「『次世代の学校・地域』創成プラン」を踏まえ、平成29年３月に社会教育法が改正され、「地域学校協働活動」が法律に位置づけられた。地域学校協働活動とは、幅広い地域住民等の参画を得て、地域全体で子供たちの学びや成長を支えるとともに、「学校を核とした地域づくり」を目指して、地域と学校が相互にパートナーとして連携・協働して行う様々な活動をいう。また令和２年４月から小学校で新しい学習指導要領が全面実施され、中学校、高等学校と年次進行された。学習指導要領では、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という理念を学校と社会が共有し、社会と連携・協働しながら未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実現が重視されている。

3　県の事業内容

県では地域学校協働活動を推進するため、三つの要素である①コーディネート機能、②多様な活動（より多くの地域住民の参画による多様な地域学校協働活動の実施）、③継続的な活動（地域学校協働活動の継続的・安定的実施）を備えた地域と学校の連携・協働体制をに発展させ、より多く、より幅広い層の地域の住民等の参画による緩やかなネットワークを形成する体制整備の支援をしている。

県では主に「学校応援団推進事業」と「放課後子供教室推進事業」の二つの事業を行っている。

(1) 学校応援団

学校応援団は、小・中学校において学校教育を支援する保護者・地域住民による活動組織であり、学校・家庭・地域が一体となって子供の育成に取り組むことで、学校の活性化を図るとともに、教職員の子供と向き合う時間の増加、住民等の学習成果の活用機会の拡充及び家庭・地域の教育力の向上を図っている。具体的な活動内容としては、授業における学習補助や読み聞かせなどの学習活動への支援、登下校時の見守りや防犯パトロールなどの安全・安心の確保への支援、学校花壇の整理や除草作業、学校図書室の整備などの環境整備への支援等を行っている。このような活動を通じて、子供たちが様々な体験の機会を得られることはもちろん、家庭・地域からの学校への理解や信頼が深まり、参加されたボランティアの「生きがい」や「やりがい」の創出にもつながっている。

【学校応援団】校地内の草刈りの取組

(2) 放課後子供教室

放課後子供教室は全ての子供を対象として、放課後や週休日等に小学校の余裕教室等を活用して、安全･安心な「子供たちの居場所」を設け､地域の方々の参画を得て、子供たちに学習やスポーツ・文化芸術活動、地域住民との交流活動等の機会を提供することにより、子供たちが地域社会の中で、心豊かで健やかに育まれる環境づくりを推進するものである。さいたま市を含む55市町村で実施（令和５年度）しており、各教室では地域の方に太鼓や昔遊びなどを教えてもらい伝統文化に親しみを持てるような

活動をしたり、公民館や地域企業と連携した活動プログラムを実施したりするなど様々な活動を展開している。

【放課後子供教室】
体験活動プログラム「よく飛ぶ紙飛行機づくり」

4　地域と学校の連携・協働の充実に向けて

多様で継続的な地域学校協働活動を実施するためには、地域の様々な団体とつながり、学校と地域住民の橋渡し役となる地域学校協働活動推進員やコーディネーターの存在が重要である。また、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、「コミュニティ・スクールと地域学校協働活動を一体的に実施」することが重要である。そこで県では、地域と学校の連携・協働体制を構築し地域学校協働活動を推進するに当たり、主に三つの取組支援をしている。

(1) 地域学校協働活動推進委員会・担当者会議

県では地域学校協働活動推進委員会を設置し、学校応援団と放課後子供教室を含む地域学校協働活動の円滑な推進について協議するとともに、更に教育事務所ごとに地域学校協働活動担当者会議を行い市町村間の意見交流の場を設けている。令和５年５月に開催した地域学校協働活動推進委員会では、学校と地域とが目標を共有しネットワークを形成していくことの重要性について、「学校と地域が相互に顔がわかる関係になるとネットワークが自然と生まれる」、「学校運営協議会で、学校と地域の目標を共有し、教職員への理解や学校と地域の交流など目線を合わせる機会や場を設けることが重要」、「地域とつながることで、校長のアドバイザー役として学校運営協議会の役割も大きくなってくる」などの意見が各委員から出された。

(2) 地域学校協働活動推進に関する研究委嘱・地域学校協働活動実践発表会

地域と学校の連携や地域内でのつながりづくりに関する研究を委嘱し、その研究成果を県のホームページを通して周知するとともに、教育事務所ごとに開催する地域学校協働活動実践発表会で実践発表をしている。令和４～５年度の研究委嘱は、北本市、鳩山町、小鹿野町、羽生市の４市町である。

その際、地域住民や団体とのネットワークを広げることに主眼を置いて、PDCA サイクルに基づき、地域・学校双方にとって効果的な活動となるよう、研究を進めていただいた。

(3) 地域学校協働活動推進セミナー・放課後子供教室研修会

地域学校協働活動の理解促進及び中核を担う人材を育成するため、セミナー及び研修会を実施している。地域学校協働活動推進セミナーでは、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進に向け、学校運営協議会委員や地域学校協働活動推進員、学校応援団や放課後子供教室のコーディネーター、小・中・高・特別支援学校の教職員、市町村担当者等を対象に実施している。放課後子供教室研修会では、放課後子供教室の活動の幅を広げ、充実を図る活動見学会を実施した。また、放課後子供教室と放課後児童クラブの連携を図るために、両事業関係者が合同でワークショップを行った。参加者からは、「次世代育成は学校現場だけの役割ではなく、社会全体の責任であると改めて認識した。（学校運営協議会委員）」「学校が地域にやってもらうだけでなく、学校も地域とともに成長、発展できるような取組を行いたい。（行政関係者）」「地域とともに行う教育活動には大きな可能性があることが分かった。地域のことをもっと知ろうと思った。（教職員）」などの声をいただいた。

【第２回地域学校協働活動推進セミナー】
文部科学省の CS マイスター（コミュニティ・スクール推進員）を講師にワークショップ「先生の思い、地域の思いを共有してみませんか？」を実施

5　終わりに

予測がつかないこれからの社会を、柔軟にたくましく生き抜いていける人材の育成を考えたとき、学校だけが子供の教育を担うのではなく、地域社会も教育に責任をもち、社会総掛かりで子供を育んでいく必要がある。そのためには、学校や地域人材が個別に教育に関わるのではなく、ネットワークをつくって取り組んでいくことが有効である。こうした考えの下、引き続き、地域と連携・協働した教育を推進していく。

人間関係づくりプログラムを活用した よりよい集団の育成を目指して

県立加須げんきプラザ　担当課長　井野（いの）　裕治（ゆうじ）

1　はじめに

加須げんきプラザは、埼玉県が運営する社会教育施設であり、幅広い年代の利用者を対象に、手打ちうどんづくり体験や野外炊事体験、ドラム缶オーブンを使ったピザづくり体験など、様々な体験活動を提供している。その他、主催事業の実施や貸館業務、学校教育への支援などを主な業務内容としている。今回は、当所が体験活動の一つとして実践と研究を重ねてきた人間関係づくりプログラムについて紹介する。

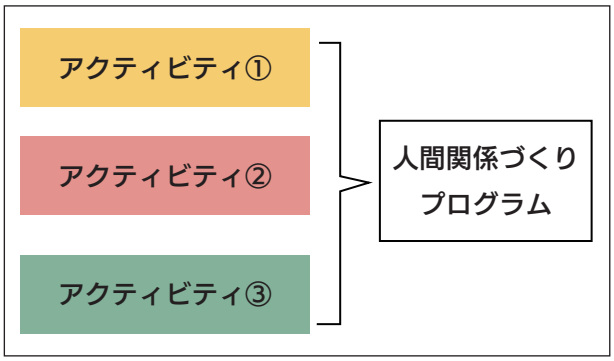
2　人間関係づくりプログラムとは

人間関係づくりプログラムとは、よりよい集団づくりを目的として、集団の構成員が様々な活動（以下、アクティビティという）を行うことで、構成員同士が

①お互いに新たな人間関係を築く
②心の壁を取り除く
③絆を更に深める
④お互いの理解を深める
⑤今までは見られなかった構成員同士の新たな一面を知る

ということを目的としたものである。

アクティビティは、集団の実態や集団づくりの目的に応じて選択することができる。そのため、集団の実態や集団づくりの目的に応じたアクティビティをいくつか組み合わせ、その集団のためだけの人間関係づくりプログラムを構成することができる（図１参照）。例えば、集団に「構成員同士の会話や交流が少ない」という実態があり、「お互いに会話や交流をさせたい」という目的があれば、構成員同士が話し合いながら成功させるという特性をもったアクティビティをいくつか選択して組み合わせる。そうすることで、アクティビティを成功させるために、構成員同士が互いに自分の考えを言葉や態度で表現したり、解決に向けて話し合ったりする過程を設けて意図的に構成員同士を交流させ、よりよい人間関係をつくるきっかけを与える。また、同じアクティビティでも、構成員の年齢や発達段階に応じて様々な応用を加えることで、小中学生から社会人まで幅広い年齢層で実施することが可能である。実際、当所では、小中学校の学級経営や、企業の新入社員の研修まで、様々な年齢層の集団に実施した実績がある。



【図１　人間関係づくりプログラムの構成イメージ】

3　加須げんきプラザにおける実践

（1）中学校での実践

①概要

出前講座（当所の職員が出向いて行う学校等での体験活動）や来所において人間関係づくりプログラムを行っている。当所では中学校からの要請が多く、その目的も「４月初めの学級開きで新たな人間関係を築くきっかけを与えたい」「ある程度できあがった人間関係をさらに深めたい」「仲間たちの新たな一面を発見する機会としたい」など様々である。当所では、そのような学校からの要望に応じて、目的に沿ったアクティビティを組み合わせて提案し、当所職員がファシリテーター（＝人間関係づくりプログラムの進行役）として実施している。

②体験した中学生の感想

人間関係づくりプログラムを実際に体験した生徒の感想をいくつか紹介する。

・まだ話したことのない人にも自分から声をかけてみんなと友達になりたいと思った。
・友達への意識が変わった。友達のよいところを見つけて、これからどのように接していくか考えようと思った。

感想から、人間関係づくりプログラムを体験することでこれからの学校生活に前向きな気持ちを抱けていることが分かる。

(2) 人間関係づくりプログラム体験講座（主催事業）

①　事業の概要

人間関係づくりプログラムの普及啓発を目的とした当所の主催事業で、県内公立学校の教職員を対象として、毎年８月上旬に開催している。「先生方がファシリテーターとして自校の児童生徒に人間関係づくりプログラムを実施できるように」という視点で事業を組み立てている。令和５年度は、小学校５名、中学校３名、高等学校６名、特別支援学校１名の先生方と、埼玉県の教員を志す「かがやき教師塾」の受講生 12 名の合計 27 名が参加した。

②事業の内容

講義と演習で構成し、人間関係づくりプログラムの基本的な概要やアクティビティの内容を分かりやすく理解できるように工夫した。また、児童生徒への指導のポイントを織り交ぜながら講義や演習を行うことで、実際に参加者が自校の児童生徒に人間関係づくりプログラムを実施し、日々の学級経営やよりよい学級集団づくりを行う際の一助とした。

【講義の内容】

・人間関係づくりプログラムとは何か
・ファシリテーターの役割
・プログラム実施の際の注意点
・プログラム実施中の児童生徒の観察の視点
・アクティビティの展開例と発達段階に応じた難易度の設定
・事例を用いた人間関係づくりプログラムの組立（実際に想定される学級の実態とその学級の担任の願いを踏まえて、学級に合った人間関係づくりプログラムを組み立てる）

【講義の様子】

【演習の内容】

・バースデーライン
（言葉を使わずに自分の誕生日を相手に伝え、誕生日が早い順に並ぶ。緊張緩和や自己開示が目的。）
・ぎょうざじゃんけん
（３人組でじゃんけんをして、グー、チョキ、パーをそろえる。アイスブレイクが目的。）
・仲間さがし
（ある題に対して参加者が答えを一つ決め、同じ答えの人が集まる。相手の考えを知ることが目的。）
・パイプライン
（半分に切った塩ビ管を使ってボールをゴールまでリレー形式で運ぶ。チームワークの向上が目的。）

③参加者の声

・知っている人がいない状態での参加で、最初は輪に入りにくかったが、最終的には会話の量が増え、距離も近くなった。
・すぐに教室でできそうなものから、じっくりと時間をかけて取り組むものまで、様々なアクティビティを知ることができてよかった。
・参加者がだんだん打ち解けていくのを実感した。大人がやっていても楽しかったので、子供たちがやってもきっと楽しいと思う。
・学級開きによいと思った。ファシリテーター役として生徒の前で実施するときは、生徒の様子を観察し、困っている生徒への配慮をしていきたい。

4　おわりに

現代はインターネットや SNS が普及し、離れた場所にいる人といつでも直接顔を合わせずにコミュニケーションを取ることができる。それは便利なことではあるが、一方で集団の中で人間関係がうまく築けずにいる人が増えているという課題もある。そのような課題に対応し、「よりよい集団づくり」を目指すのが人間関係づくりプログラムである。さらに、人間関係づくりプログラムは、同じアクティビティであっても、ルールや説明をするときの言葉遣いを変えたり、集団の構成員に応じた難易度を設定したりすることで、小中学生をはじめ、教職員研修や企業の社員研修など幅広い年代の人々を対象に実施することが可能である。当所の人間関係づくりプログラムが「よりよい集団づくり」に寄与し続けるように、今後も更なる実践や研究を重ねていく所存である。

はるかぜと、ともに
～岩槻はるかぜ特別支援学校が開校しました～

県立岩槻はるかぜ特別支援学校　校長　神田（かんだ）　佳明（よしあき）

はじめに

本校は令和５年４月、県立特別支援学校として第38番目に開校した、知的障害のある児童生徒のための学校である。新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況下での開校準備のため、激動の社会背景の影響を受けた特別支援学校ともいえる。

私自身、開設準備の段階から関わったことから、無事に開校を迎えられたことに対してほっとすると同時に、新たに迎えた児童生徒、教職員、そして保護者や地域の関係者と共に、より良い学校となるよう、気を引き締めて取り組んでいる最中である。

開校の経緯

本校は、県南部・県東部における知的障害特別支援学校の過密解消の目的で設置が検討され、旧県立岩槻特別支援学校の校舎の利活用という形で進められた。平成28年12月、埼玉県立小児医療センターの移転に伴い、岩槻特別支援学校の機能も移転され、旧校舎が残った。この校舎を基盤に新校舎の増設、体育館・給食棟の改築、校庭の整備などを行い、新しく「埼玉県立岩槻はるかぜ特別支援学校」として開校した。そのため、大きな丸窓や広々と明るい教室など、旧岩槻特別支援学校の特徴をそのまま受け継いでいる。そのため校舎だけでなく、旧校の関係者の思いを受け継ぐことも大事な使命だと考えている。

本校の概要

開校当初の児童生徒数は200名。小学部１年生から高等部３年生までの児童生徒が学習している。通学区域が定まっていて、蓮田市全域、さいたま市岩槻区全域及び見沼区の一部となっている。そのため、昨年度まで県立上尾かしの木特別支援学校及び県立春日部特別支援学校に在籍していた児童生徒のうち、本校学区にお住まいの方のほとんどが、この４月から本校に通っている。

本校の特徴

本校の特徴をあげると以下のようになる。

（1）視覚支援を重視した学校
（2）ICT等の教育支援を重視した環境
（3）教育課程の連続性・段階性を重視した学校

（1）については、旧校舎棟と新設校舎棟の融合した学校であることから、児童生徒の動線がやや複雑である。そのため、階段の色を水色や桃色、緑色など、エリアごとに塗り分けている。

また、ピクトグラム（絵文字標記）を用いて、何を勉強する教室か、分かるようにしている。図書室に関しても県立久喜図書館の力をお借りして図書室棚のレイアウトや本の配架法などを助言いただき、一目で分かるようにしてある。

（2）については、GIGAスクール構想で進んだ、一人一台端末の導入を受けて、ホワイトボードにタブレット端末の画面が映し出されるようにプロジェクターの設置を行った。また、台数は限られているものの、大型の電子黒板などを導入した。さらに、「わくわくルーム」という部屋には、部屋中に映像が映り、それを手などで触れると映像が変化するといった相互作用（インタラクティブ）装置が付いていて、児童生徒の主体的な動きを引き出す仕組みがある。

（3）については、昨年度まで在籍していた各特別支援学校の教育課程やこれまでの学習履歴を元に本校の教育課程を設定した。

また、本校は小学部、中学部、高等部の三つの学部を全て設置したことから、各学部の段階性、継続性を踏まえて学部教育目標などを全て設定した。

学校教育目標

本校の学校教育目標は次のとおりである。

生き生きと生活する力をたくわえ、社会の変化に対応できる児童生徒の育成

「社会の変化に対応できる」という点が、一番の重点事項である。本校の児童生徒の中には環境の変化に敏感であったり、変化そのものを苦手・苦痛に感じたりする子もいる。しかしながら新型コロナウイルス感染症拡大期には、学校が臨時休校となったり、密を避けたり、マスクの呼びかけがなされたり、ということが行われた。そのようなことから世の中のICT化や今後の予測不可能な社会への対応も含めて、周りの支援を十分に受けながら、その子なりに社会の変化を受けとめてほしいと思っている。

また、「生き生きと」という言葉には、児童生徒自身が人生の主人公として「生き生きと生活」してほし

いという願いと、生活する力を「生き生きと蓄えてほしい」という両方の願いを込めた。

目指す児童生徒像

学校教育目標の表現が児童生徒にとって分かりにくい分、目指す児童生徒像は、語呂合わせ的に分かりやすくした。

は	はつらつとした人
る	ルールを守る人
か	考える人
ぜ	全力を尽くす人

目指す児童生徒像は高等部卒業段階までに目指すべき姿であるので、「○○する子」ではなく、「○○する人」となっている。以下は具体的な中身となる。

はつらつとした人…心身を健康に保ち、体力の維持向上ができる
ルールを守る人…社会のルールを学び、行動できる
考える人…支援を受けながらも自分で考え、行動できる
全力を尽くす人…自分の持てる力を最大限発揮できる

表現は違うものの、学校教育目標の趣旨に合わせて、より明確なものにしたつもりである。

校章について

初めて岩槻はるかぜ特別支援学校の工事区域に足を踏み入れたのは、穏やかに晴れた春の日のことであった。前面に広がる広大な田畑、桃や桜を始めとする春の花々が広がる後方の美しい里山に感動を覚えた。

校名が「埼玉県立岩槻はるかぜ特別支援学校」と決まったのは夏の時期だったかと思うが、校章に関しては春の学校周辺の美しい風景を、特急列車のヘッドマークのようなデザインで表せないだろうか、ということが原点となる。その後、いろいろな方の力を借りながら、現在の校章が誕生した。

校章としてはデザインが細かい部類に入るが、校章を塗り絵の題材として授業で使用するなど、児童生徒にも受け入れてもらえたと感じている。

校歌について

コロナ禍の状況で、学校現場では、換気の徹底や密にならないことなど、これまでにない対応が求められた。さらに、歌唱指導の制限、調理学習を実施しないなど、特別支援学校の児童生徒が楽しみにしている学習活動の制限もあった。

このような状況下、校歌に関しては、音楽の指導として取り上げられた数少ない歌の一つである。今後再び、あるいは新しい感染症が登場して歌唱指導が制限されたとしても、校歌は児童生徒に指導すべき歌である。また、校章と共に、新しい学校の拠り所となるものだと思う。

そのため、歌唱指導に耐えられる「教材としての校歌」、つらいことを乗りこえる「応援歌としての校歌」、そして、卒業後も歌える「心の支えとしての校歌」を作りたい、という思いがあった。

この思いをくんでいただいたのは、現場での指導経験が長く、作曲に長けた先生として紹介いただいた県立特別支援学校羽生ふじ高等学園　菅原俊教諭（当時）である。菅原先生の協力を得ながら、本校校歌「春風とともに」は誕生した。

なお、本校の校歌ではあるものの、歌詞の中に学校名は入っていない。楽符や曲データは本校ホームページに掲載してあるので、聞いていただいて、もし気に入ったならば、ぜひ歌っていただきたいと思っている。

今後に向けて

新入生も同様だが、これまで別々の学校に通っていた児童生徒が、新しい教育環境に慣れてくれるだろうか、と心配していたが、１学期のうちにほとんどの児童生徒が慣れて、前から一緒だったように過ごしている。そして、運動会やプール、修学旅行や文化祭など、一つ一つの行事を実施し、経験を積み重ねてきた。さらに、地域に知っていただくことや地域で共に活動することも進んできている。

今年度の高等部第３学年の生徒たちは、本校在籍としてはわずか１年で卒業となる。それでも本校が生徒たちの母校として誇りを持てるよう、そして、心の拠り所となるような学校にしていくことを今後も心がけ、努力していきたいと思う。

＜校章について＞
小学部・中学部・高等部の３本の春風が美しい里山に吹き込み、大空に向かってはばたいていく様子を図式化したものです。

ICT 活用による学校教育の改善

一人一台の学習者用端末と教職員用の校務用端末が整備されて３年。
鴻巣市及び所属校における ICT 活用による学校教育の改善に向けたこれまでの取組について紹介する。

鴻巣市立吹上小学校　校長　清水（しみず）　励（はげみ）

1　はじめに

「日常の文房具として活用すること」を目指して整備された一人一台の学習者用端末も、使用され始めて３年目となり、「使用の安定期」に入ってきた感がある。また、教職員が使用する校務用端末も「欠かせない仕事道具」としてその活用が定着してきた。

本稿では、鴻巣市及び勤務校において、以下の課題に対して取り組んできた ICT 活用の実践について記すものとする。

1　ICT 機器活用の日常化
2　「学びの改善」のための活用
3　「業務改善」のための活用

いずれも道半ばの実践であり、読者の方々の参考となるものがあるか甚だ不安であるが、少しでも得るものがあれば幸いである。

2　鴻巣市及び所属校の概要

(1) 鴻巣市は、埼玉県のほぼ中央に位置し、人口約 12 万人、東京へのベッドタウンとしての利便性と豊かな自然が残る市である。「ひな人形と花のまち」、「荒川の川幅日本一」や「ギネス認定の四尺玉花火」などでも知られている。市内には、小学校 18 校、中学校８校がある。

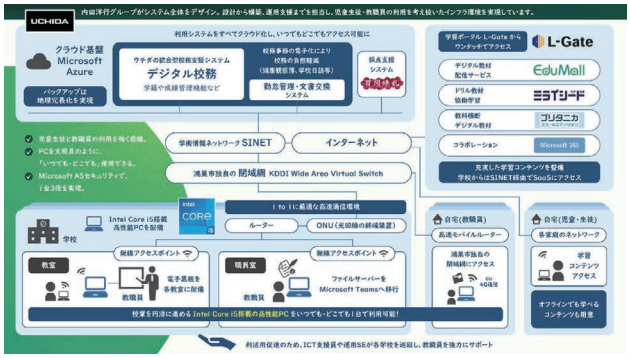
(2) 鴻巣市立吹上小学校は、明治 22 年開校、134 年目の学校である。現在の児童数は 554 名、学級数 19 学級（特別支援学級２学級含む）の中規模校である。吹上駅から徒歩５分の好立地にあり、８年前に昭和 11 年竣工「２階建て木造校舎」を全面改修し新校舎を設置した。昭和 62 年まで校地内に SL が常設展示されており、現在その SL は、秩父鉄道パレオエクスプレスとして現役復帰し、往年の雄姿のまま警笛高らかに秩父路を走っている。

3　鴻巣市の ICT 環境

鴻巣市では、「ICT 機器の活用により、新しい時代で活躍するために必要な資質・能力を育成する」を基本理念とする「鴻巣市教育情報化推進計画（令和元年～令和６年）」の下に、鴻巣市教育委員会と各学校が連携を図りながら、学校教育の情報化に取り組んできた。

本市の ICT 環境の特徴として「フルクラウド化」がある。児童生徒が、学校・家庭でもシームレスかつ安全に使える環境、そして、教職員の業務改善につながる校務の ICT 環境が整備されている。

クラウド環境は、国内の教育委員会では初とされる鴻巣市独自の閉域網と学術情報ネットワーク（SINET）を介して Microsoft Azure に接続し、Microsoft 365 Education を活用している。



【鴻巣市が整備した教育 ICT 環境】

学習者用及び校務用端末は、いずれもタブレットとして使用可能な Windows 端末が貸与されている。あわせて、全教職員には、高速モバイルルータが一人一台貸与されており、これにより教職員は、学校外でも学校内と同じ環境で端末を使用することができる。これは、現在の勤務状況を考慮した整備であり、業務改善に大きな成果があると感じている。

【全教職員へモバイルルータ貸与】

また、教職員は、「校務用」と「学習指導用」のネットワークの使い分けを意識することなく、貸与された一台の端末ですべての仕事を行うことができ、各自に付与されたメールアドレスの活用も併せ、ストレスな

く利用できる恵まれた ICT 環境にある。

ICT 環境の整備は、各教育委員会の考え方等に因るところが大きい。本市教育委員会は、学校支援担当・学務担当・教育総務担当が、横の連携・協力を図りながら、「教育の情報化により、児童生徒にどんな力を付けるのか」ということを見据えながら、児童生徒や教職員がより使いやすい環境を整備することに御尽力いただいている。「市教委のリーダーシップと横の連携・各学校との縦の連携」は、ICT 環境の整備だけでなく、その後の有効活用を進めるためにとても重要な要素であると確信している。

4　具体的な取組

教育情報化推進に向けての、鴻巣市及び勤務校における取組を抜粋する。

(1) 鴻巣市としての取組

ア　学校教育情報化推進ワーキンググループ

令和２年度の端末整備前に発足し、各学校の情報教育主任など ICT 活用の推進者をメンバーとして、端末整備に関わる疑問点や課題点等について協議を行った。端末持ち帰りについての課題や端末利用のルールの検討、Microsoft Stream を使用した「ICT 利用のワンポイント動画」の作成等を行った。

イ　学校教育情報化推進プロジェクトチーム

令和４年度に発足し、市内校長と主幹教諭・教務主任・教諭のうち情報化推進キーパーソンをメンバーとして、３年後のビジョンの構築とその具現化を図ることを目的としている。

授業における活用事例や「教科横断的 PBL」についてまとめたブックレット（概要版・詳細版）や、授業のヒントとなるアプリ活用の説明動画等、各校の新たな学びへの足がかりとなる資料を作成した。今年度は、「鴻巣市デジタル作品展」を計画し、市内各学校の学習活動で作成された成果物を募集し、成果物の質的向上から学習活動の改善を図る取組を行う予定である。

【R4 ブックレット表紙とデジタル作品展ポスター】

ウ　ICT 活用の事例紹介

市教委指導主事やサポート企業が積極的に授業を参観し、ICT 活用の好事例を紹介し、活用方法の共有化を図っている。

【活用事例の紹介】

エ　端末活用状況の集約

各学校における端末の活用状況について、月毎に一日当たりの起動回数を集計し、各校にフィードバックしている。学校内活用と学校外（持ち帰り）活用に分けて集計され、各校が設定した活用目標値との予実管理が行えるようにしている。本市においては、端末の持ち帰りを積極的に推奨しており、家庭へのルータ貸し出しも行っている。（ただし接続料等は各家庭負担）

オ　新たな環境整備

（ア）　特別教室「STEAM Lab」の設置

企業の支援を受け、鴻巣中央小学校に「のすっ子未来教室」と、本校に「コスモ・スペース」を設置した。当教室には、動画編集が可能な高スペック端末や 3D プリンタ、壁面投影の複数のプロジェクタ、交流活動に有効なミーティングスピーカーマイクと Web カメラ等が整備されている。「協働的な学び」が行いやすいよう、移動式の大型モニタやホワイトボードにもなるパーティション、扇形天板の児童用机を整備している。

【特別教室「コスモ・スペース」】

「コスモ・スペース」という教室名には、旧吹上町の花がコスモスであったことや、子供たちの学びが宇宙のように壮大に広がってほしい等の思いが込められている。児童は、この教室での学習を楽しみにしており、グループでの話合い活動を行う授業において頻繁に使用されている。

（イ）　総合学力調査と個別支援アプリの導入

端末整備と同時に導入されていたドリル学習のアプリが、更に個に応じた個別学習のツールとして有効に活用できるよう、今年度より「総合学力調査」を実施することとなり、調査を12月に実施する。

また、読み書きや認知特性の基礎スキルを測り、個々の特性に応じた課題に取り組むアプリ（まるぐランド）が導入された。このアプリの活用は、早期に児童の特性等を把握し、時期を逃さぬ適切な支援を行うための有効なツールとしても期待されている。

鴻巣市としての取組は、この他にもデジタル・シティズンシップ教育の推進や、学校の業務改善（負担軽減）に向けての取組等、多岐にわたって行われているが、紙面の都合で一部の紹介となることを御容赦願う。

鴻巣市と企業が連携して作成した「鴻巣市の学校教育情報化」のプロモーションビデオも、本市取組の理解の一助となるであろう。

https://www.youtube.com/watch?v=Ss4w0zZA3Ps

（2）学校としての取組

ア　学習指導等における ICT 活用

（ア）　学習系アプリの活用

本市ではベネッセのオンライン学習ツール「ミライシード」を導入している。

【ミライシードのメニュー画面】

授業では、「オクリンク」「ムーブノート」を主として活用しており、児童の考えを学級全体で共有したり、様々な考え方などをカテゴライズし比較したりする際に有効なツールとなっている。これまでの授業では、意欲的に発言する児童の意見が中心となり展開されることが多かったが、当アプリの活用により、互いの学び合いが促進され、多くの児童の伸長に繋がるものと期待している。「自分や友達の考え方などを知り合えること」は、児童が感じている ICT 活用の大きなメリットであり、何気ない当たり前の使用方法として、更なる活用の定着を図っていきたい。また、ドリル学習として、朝自習や家庭学習で「ドリルパーク」や「まるぐランド」に取り組ませており、休み時間にも児童が自主的に取り組む姿もよくみられる。中学年以上では、Microsoft の Office 系アプリの活用も積極的に行うとともに、資料作成に PowerPoint を活用し、「分かりやすさ」を考えさせながら資料作成に取り組ませている。グループで話し合う際には、Whiteboard を使用し、同時編集のよさを生かした活用も行われている。

コミュニケーションツールとして Teams の活用も、学年・学級や児童委員会などで進められている。児童への連絡ツールや、欠席者へのオンライン学習の実施などの機能に併せて、ネット上でのルールやマナーを実践的に学べる場として活用している。

（イ）　端末持ち帰りの推進

家庭で取り組む課題の提示と併せて端末の持ち帰りを行っている。「毎日意味も無く持ち帰らせること」は行わず、持ち帰りのねらい（復習問題への取組や授業に関わる事前の学習等）を明確にして、持ち帰りを行っている。（充電アダプタは家庭用を配布済み）

（ウ）　PBL・STEAM 教育への取組

学校課題研究のテーマを「進んで考え、豊かに表現することができる児童の育成　～ ICT を活用した多様な学びを通して～」と設定し、学習のアウトプットである「表現」を切り口に、学習改善を図る取組を行っている。PBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）に繋がる学習活動として、解決すべき課題と成果物を明確にし、社会とのつながりを意識した活動を『吹上小テーマ学習』として「総合的な学習の時間」を中心に研究を進めている（本年度１年次）。昨年度、４年生国語「ごんぎつね」を基にした教科横断的な学習の実践と

【「STEAM ごんぎつね」の授業】

して、「ごんぎつねのSTEAM化」に取り組んだ。「ごんぎつね」の学習後に、個々の児童が更に調べたいテーマについて調べ、その発表を愛知県「新美南吉記念館」の学芸員の方にオンラインで行い、評価等をいただく取組を行った。

（エ）　ビデオ会議等の活用

オンライン授業は、全クラスで実施できる機器と体制が整っており、保護者と約束事を確認した上で、必要に応じて日常的に実施している。また、外部指導者の来校が難しい場合には、ビデオ会議を活用した学習（３年生社会「スーパーマーケットの方の話」、１年生校外学習の事前学習「動物園の園長さんとの交流」、６年生外国語「オーストラリア児童との交流」等）を行っている。行事によっては、感染症の流行状況や会場の都合で、児童や保護者が一斉に集合できない場合があるが、その対応としてYouTubeライブ配信により、多くの方が視聴できるようにするとともに、実施後にも家族で一緒に視聴できるようにしている（運動会・校内音楽会等）。

【動物園長との交流と音楽会ライブ配信】

イ　校務における活用

（ア）　校務支援システム

「文書収受・回覧」「服務管理」等は、全てシステムに移行している。時間外在校時間についても各職員が端末で在校時間を確認できるため、勤務時間への意識変容の一助となっている。毎朝の健康観察の入力から、年度末の指導要録作成までの一連の処理がシステム化されており、教職員の負担軽減に果たす役割は大きい。

（イ）　各種連絡等のオンライン化

職員間（他校含む）の連絡はTeamsチャットで行い、時期を逃さぬ報告と連絡ミスの軽減につながっている。また、職員会議資料のペーパレス化や職員朝会の連絡事項を掲示板に掲載し会議時間の短縮を図っている。これらの連絡は、Teamsの教職員チーム内に必要なチャネルを作成し、情報を見つけやすいようにしている。各種アンケート調査等へのFormsの活用も定着し、集約にかかる時間を分析等に使うことができるため、単なる効率化以上のメリットがある。

ウ　地域・保護者との連携への活用

全家庭登録済みの「連絡メール」を活用し、印刷物の配布は極力行わないようにしているが、紙面配布した方がよいと判断したものは印刷して配布している。

「児童の欠席連絡」はFormsで行い、朝の職員室の電話が鳴ることはほとんどなくなった。また、「休日の体調不良連絡」「児童引渡し迎え遅れ連絡」等もFormsで行い、Power Automateを使用して保護者からの回答入力があった時点で管理職の携帯端末にメール送信する仕組みを作成し、休み明けの急な対応に役立てている。

ほぼ毎日、HPの「日記のページ」に学校の日常の様子をアップしている。保護者・地域との連携は、学校の諸課題解決の基盤であり、HP更新は校長の役割（校長にしかできない面あり）と考えている。本市では2019年より学校HPにedumapを使用している。すでに有償のCMSを導入済みであったことやedumapが正式リリース前であったにも関わらず、市内全校のHP移設を短期間で実現した市教委に感謝している。

【本校のホームページ】

HP ⇒ https://fukiage-e-konosu.edumap.jp/

5　結果や成果

- 現在のICT環境整備前、出勤直後に端末を開く教職員は、ほとんどいなかった。しかし、全ての教職員が、校務における端末利用の必然性とそのメリットを実際の職務で知ることができたことは、「教育の情報化」の大きな前進であるといえる。
- 授業改善の視点として、資質・能力重視の「コンピテンシーベースの学び」の重要性に着目した取組が進められつつある。
- 国や県の学力調査において、鴻巣市の全学年全教科の平均正答率が県平均値を上回っていることは、小・中学校における授業改善の成果の表れと考えられる。
- 時間外在校時間の月80時間超えの職員は、ほぼいなくなったが、「業務改善の本丸は授業改善」ということを念頭に業務改善に取り組んでいく。

「信じてゆだねる」国語授業

～「自分らしく学ぶこと」と「あなたらしく学ぶことを受け入れること」の往還～

「教える」から「学ぶ」に授業が変わっていくには、教師の考え方を変える必要がある。それは「手をかけ、導く」ということから「信じて、ゆだねて、待って、支える」ということに変わるということである。そのために、「四つの自己決定」ができるように環境を整え、対話を大切にしながら「自己評価の感度を高めること」「目的を共有すること」「全体語り・1on 1」に取り組んできた。子供の未来のために、あえて「ゆだねる」ということを考えてみてはどうだろうか。

埼玉大学教育学部附属小学校　主幹教諭　吉野（よしの）　竜一（りゅういち）

1　テーマ設定の理由

「子供は未来からの留学生」という有名な言葉があるが、それはどのような未来だろうか。

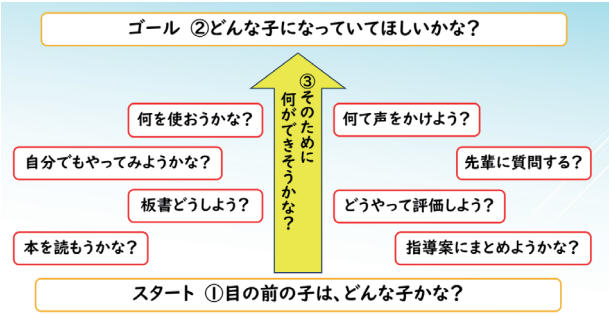
私が願う未来とは、「一人一人が生きたいように生きることができ、その自由を互いに尊重し合う未来」であり、「その自由が尊重されることを前提に、よりよい方向へ進もうとする未来」である。では、そうした未来に帰っていく子供たちのために、教育を通して成すべきことは何だろうか。私は大きく三つのことを考えている。一つめは、生きたいように生きる力を付けること。二つめは、相手の「生きたいように」を受け入れる力を付けること。そして、三つめは、よりよい合意形成を求め続ける力を付けることである。

これまで私は、「粘り強く自分で学びをつくることのできる子」の育成を目指して実践研究を行ってきた。これは前述した一つめと関連しており、子供たちは、自分の「やりたいこと」を大切にしながら、それが「自分をよりよくすること」なのかを自身で価値判断することで、自分で学びをつくることができるようになった。一方で課題も残った。それは、二つめの「相手の『生きたいように』を受け入れる」という姿につながる、他者の学びを受け入れる姿が見られなかったことである。子供たちにとって、個の学びが尊重されることは心地よく、それ故対立を避けるようになった。表面上、相手を受け入れているように見えても、それは自身への影響がないからともいえる。これでは、三つめの合意形成を求め続ける姿にはつながらず、未来に帰っていくことはできない。自分の学びをつくることができるようになってきたからこそ、大きな目的に向かって対立を乗り越え、いかに納得するかという他者との学びも経験できるよう、このテーマを設定した。

2　実践の内容

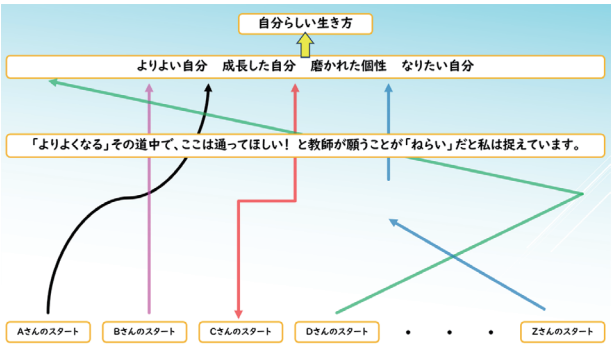
(1) 四つの自己決定

これまで、私は「授業は教師がつくるもの」だと捉えていた。そのために目の前の児童の実態を把握し目指す児童像を定め、そのギャップを埋めるために授業という手立てをうっていた。



【図１　これまでの授業】

しかし、現在は「授業は子供がつくるもの」と捉えるようになり、「教える」から「学ぶ」に変わったことを実感している。



【図２　現在の授業】

図１と図２の大きな違いは、矢印が複数になったことである。子供たちは多様であり、それぞれの学びがある。それを尊重しながらも、ねらいを達成できるようにするために、指導事項をしぼる必要が生まれると考えている。では具体的にどのように学びを尊重するのかというと、子供が四つの自己決定をできるようにしている。

一つめは、方法の自己決定である。画用紙にまとめるのか。一人一台端末を使ってまとめるのか。机で書くのか、床に広げて書くのか。子供は、自分に合った道具や場所を自己決定して学びをつくっていく。四つの自己決定の中で、取り組みやすいものといえる。

二つめは、相手の自己決定である。一人で考える

のか、友達と相談するのか。相談するなら誰と行うのか。教師が意図的にグループを決めることもあるが、ゆるやかにつながる関係性を尊重することも忘れてはならない。

三つめは、時間の自己決定である。１単位時間の中で、単元の中でどの活動にどれくらいの時間をかけて取り組むのかを自分で決めることで、自由進度的に学びを進めていくことが可能になる。

四つめは、課題の自己決定である。この単元で身に付けたい力は何か。この単元でどのような言語活動に取り組むのか。とても大きな自己決定と言えるため、最後まで教師が決める可能性もある。実態に合わせてゆだねていく必要がある。

こうした自己決定を促すために、はじめは教師が選択肢を示すことも必要である。ゆだねることができそうなところから、少しずつ取り組むことが大切である。

(2) 自己評価の感度を高めること

教師の目で評価したことを伝えることは必要不可欠である。しかし、教師の「ジャッジ」になってしまうことには抵抗を覚える。では、何のために評価をするのか。それは評価を子供に還元するためである。還元するとは、子供が自分で自分のことを評価できるようにすることであると考える。「こんなにも成長したね」「ここは、まだまだ課題が残るね」と伝え、必ず「あなたはどう思う？」という問いをなげかけるようにしている。そうした対話を通して、ともに評価をつくりながら、子供の自己評価の感度を高めることが、よりよい自己決定につながっていくと考える。

(3) 目的の共有

自己決定を軸に学びを進めていくと、意見が対立することが減少し、他者と合意形成を図る場面が少なくなる。そこで大きな目的を共有する。すると、目的には納得しているものの、アプローチが異なるという状況が生まれやすくなる。目的の達成のために、ＡでもなくＢでもない新たなＣを考えることを意図して、目的の共有を行うことは大切であるといえる。

(4) 全体語り・１on １

子供が学びをつくる上で、教師がやるべきことの一つめは「全体語り」である。これは、私が大切にしていること・願いを子供たちと共有する時間である。なぜこの環境を設定したのか意図を伝えたり、今は何を目指しているのか方向性を伝えたり、具体と抽象をつないだりする時間と捉えている。

二つめは１on １で関わること、文字どおり子供との１対１の対話である。ここでは、子供の強みと子供が示す成果を強調するために、学びの過程に関するフィードバック、自身の調整に関するフィードバックを軸に対話を行う。

この前提となるものは、「子供を信じること」である。教師は、善意から子供たちに声をかけ、手をかけ、導こうとすることが多い。だが、子供の未来のために、信じて、ゆだねて、時に支えることこそ、教師の行うべきことであると考えている。子供は自ら学びたいと思っている、成長したいと願っていると信じて、一人一人が個性を発揮し、一人一人の可能性が広がるように取り組んでいきたい。

3　成果と課題（○：成果、△：課題）

○県の「学力学習状況調査」の数値、独自に作成した国語の指導事項を確認する調査問題の数値、いずれも高い数値を維持している。特に、「考えの形成」を問う問題について、自身の考えを整理して記述することができた。

○一般社団法人 ScTN の作成した質問紙調査においても、高い数値が出ている。特に、「自分の本当の気持ちを聞いて、自分の生きたいように生きる。」「達成したい目標や、解決したい問いや課題を、自分なりに立てること。」「学ぶことを通して、自分なりの表現や、自分らしさを追い求めること。」といった質問について、９割以上の児童が、「とてもできている。できている。」と回答している。

○調査問題や質問紙など数値に表れる成果だけでなく、子供たちの表情や言動にこそ成果が表れていると捉えている。

「私は、読むことに課題があるので、この説明文の学習をもう少し続けて深めたいと思います。」

「調べたり聞いたりしたことをまとめたけれど、自分らしさが欠けていると感じています。だからここで自分の気持ちと向き合って、テーマを考え直したいと思います。」

「自分も友達も未来もよりよくなるように、学びをつくることが大切だと考えています。」

こうした言葉を残す子供たちが増え始め、相互によい影響を与えている。学ぶ風土のようなものが形成されたことが、大きな成果と言える。

△この学習の進め方には、多くの時数を必要とする。指導事項を整理し、カリキュラムマネジメントに努めることが不可欠である。

4　今後の展望

ある日突然授業が変わるということは、なかなか起こり得ないのではないだろうか。それでも少しずつ授業が変わり、学校が変わり、教育が変わろうとしている。今日より明日、よりよくなれたといえるように、できることに取り組んでいくことが、最も大切であると考える。

生徒の心に種をまく
～「読めない」から「読みたい」へかえる試み～

読書が苦手な生徒のために、図書館として「読書へのハードルを下げる」取組、「本との出会いをプロデュースする」取組を体験する場の提供も心がけながら、人と人、機関とつながることで行っている。

県立妻沼高等学校　司書　長沼（ながぬま）　祥子（しょうこ）

1　はじめに

本校は、埼玉県熊谷市と群馬県の県境にあり、「勤勉・努力」を校訓とし、「母校を誇れる生徒を育てる学校」を目指す全日制普通科の高等学校である。「学び直しから大学進学まで」というスローガンの下、多様な生徒を受け入れ育てる学校となっている。

2　「読めない」生徒が多い現状

本校には、様々な「特別な教育的ニーズのある生徒」が一定数在籍しており、それらの生徒の読書へのハードルは高い。また、本への興味・関心が少なく、本を手に取る機会が少ない。

そのため、図書館では、読書が苦手な生徒のために、「読書へのハードルを下げる」取組や「本との出会いをプロデュース」する取組の二つの側面からアプローチをしている。また、団体や機関を活用し、利用者へ幅広いサービスを提供できるよう心がけている。

3　「読書へのハードルを下げる」取組

(1) 利用者の居場所作り

本校の図書館は特別棟の５階に位置しているため、ぬいぐるみやプラモデル、ボードゲームなど、生徒が興味を持つものを置き、居心地の良い空間作りを目指している。また、書架サインにルビを振ったり、ピクトグラムを用いたりして、書架のビジュアル化を行い、利用者のアクセシビリティの促進に努めている。

図書館内には、複数の特集展示コーナーを設け、授業や学校行事、生徒が興味のあることを中心にテーマを考え、毎月展示の入れ替えを行っている。

(2) ノベライズ本やマンガの充実

読書が苦手な生徒もマンガやアニメ、映画などビジュアル的なメディアは好きで、よく話題に出る。朝読書では、マンガが禁止されているため、ノベライズ本を求める生徒のニーズに合わせて「映像化されている本コーナー」を作り充実させた。コーナーには映画館で入手したチラシを飾り、生徒の興味を掻きたてるようにした。

また、絵がある方が読みやすい生徒が多いことからマンガの収集提供にも積極的に取り組んでいる。マンガのリクエスト対応や様々な分野の学習マンガの充実を心がけている。

(3) 多文化サービス

本校には海外にルーツを持つ生徒が一定数在籍している。そのため、生徒の第一言語の洋書の収集や提供をしたり、日本語支援員と連携して、日本語学習用資料の収集を行ったりするなど、「特別な教育的ニーズのある生徒」に対する支援となる多文化サービスについても、積極的に取り組んでいる。

また、マジョリティの生徒が多文化への理解を深めるきっかけを作るため、リアルな言語体験ができる展示キットを総合教育センターより借用して、多文化をテーマとした特集展示を行った。さらに、多文化理解を深めるイベントを以下のとおり企画・実施した。

4　「本との出会いをプロデュースする」取組

(1) イベントの企画

ア　ハロウィンパーティーで多文化交流しませんか？

埼玉県国際交流協会とコラボレーションして、多文化理解を深めることを目的としたハロウィンパーティーを日本語支援員と協力して実施した。

当日は、国際交流協会より民族衣装を借用し、希望する生徒の仮装に活用し、また様々な言語のゲームや世界の国の遊びを行い、世界の言語や文化を体感してもらった。生徒 20 名、教員 10 名の計 30 名が参加し、「とても楽しかった」「また企画してほしい」とかなり好評であった。

【ハロウィンパーティーでの様子（中国語クイズ）】

イ　図書委員会の活動

図書委員は係ごとに活動しており、図書委員考案のくじをひいて、当たった数字の本を借りて、しおりなどの景品をプレゼントするハロウィンイベントや図書委員が作成するクリスマス福袋は、毎年好評で多くの生徒が参加をしている。

ウ　図書館のマスコットキャラクター投票

図書館へ親しみを持ってもらうため、図書館のマスコットキャラクターを作る企画を行った。キャラクター募集は校内一般の他に美術の授業とコラボレーションした課題作品と合わせて19件ノミネートし、全校生徒・職員を対象に投票を行った。

185票の投票の結果、マスコットキャラクターが決定した。今後、図書館を盛り上げる起爆剤として活用していきたい。

【左：図書館マスコットキャラクター「ほんっぱ」】
【右：探究学習版の点検読書の様子】

(2) 授業連携

ア　点検読書と本の試し読みワーク

点検読書とは、本を用いたつまみ読みワークで、ワークシートに沿って書誌事項や構成を確認したのち、まえがきやあとがきを読んで「著者の伝えたいこと」の抜き出しに挑戦、その上で「読みたいかどうか」を判断する。

調べ学習では、この点検読書を応用し、「テーマ決め＆テーマについて理解を深める」探究学習版の点検読書を行った。生徒には様々な情報に触れてもらい、「自分が何に興味を持つのか」という「探究のアンテナ」を作るためのツールとして、本を活用した。その際、司書から出典の書き方や目次・索引の使い方の説明を行い、生徒の情報リテラシーを育てるよう努めた。この点検読書は、生物・保健体育・家庭科や進路に関する学年行事でも行い、生徒が様々な本に触れるきっかけを作った。

また、主に国語科の授業で、様々な本を試し読みするワークショップを行った。「キラキラ、キュンキュン」「ハラハラ、ドキドキ！」等の五つのジャンルごとに本を用意し、生徒が本を試し読みして、評価する。「様々な本を手に取る良いきっかけとなった」と生徒からも好評であった。

イ　食料自給率を考える展示と出前授業

図書館内で総合教育センターより借用した「JICA地球ひろば食堂」（国内生産のみの食料で作られた1日のメニューの食品サンプル）を活用して、「日本の食卓を考える」特集展示を行った。その際、家庭科の教員から要望があり、展示品を教室まで届け、生徒に見せる出前授業を行った。食や農業の本を紹介するブックトークも一緒に行うことで、普段は手に取られない本を紹介する良い機会となった。

その他、保育の選択授業で、絵本の読み聞かせやわらべうたの指導をするなど、本を読むだけでなく、生徒が様々なものに触れたり、体験したりすることを意識して、積極的にイベントの企画や授業連携に取り組んでいる。

【「日本の食卓を考える」の特集展示と絵本の読み聞かせ・わらべうたの授業をする様子】

5　おわりに

このような取組の効果をまとめると、以下のとおりである。

① 2020年度と2022年度を比較し、1人当たりの貸出数等が増えている
②リクエスト及びレファレンス件数が伸びている
③授業利用で場所の提供だけでなく、資料提供や利用指導など、司書と教員が協働した授業連携が増えている
④外部機関との連携の機会が増え、生徒へのサービスの幅が広がっている

今後は、学校の教育活動の中に読書活動が組み込まれるよう、現在取り組んでいることを継続しつつ、より幅広い活動について、毎年実施している読書アンケートを参考とし、積極的に提案をしていきたい。

定時制高校におけるキャリア教育
～哲学対話の授業実践～

県立狭山緑陽高等学校　教諭　小澤（おざわ）　貴也（たかや）

1　はじめに

本校は県立高校再編整備計画に基づき、当時の狭山高校、川越高校（定）、豊岡高校（定）を統合し、平成20年に開校し、今年度、開校16年目を迎える。生徒の実態としては、不登校の経験がある・日本語を母国語としないなどの背景を抱えた生徒が多く在籍している。また、相手の意見を聞き自分なりに咀嚼（そしゃく）して考え、整理し表現するということが上手くできない生徒も多い。さらに、小学校・中学校の「学び直しの場」として本校を選んだ生徒もおり、進学と就職の際の面接に不安を持つ生徒もいる。以上を踏まえて、教員には、それぞれの特性に配慮し、希望進路の実現に向けたキャリア教育の充実が課題となっている。前副校長はこの課題を解決するため、かねてより着目してきた「哲学対話」を本校に導入することを提案した。そして一昨年度、その開発者である東京大学の梶谷真司教授をお招きして教職員研修会を行い、先生方が手応えを感じ現在に至っている。「哲学対話」とは近年学校教育で注目されているものである。都立高校で実践され、大学への進学実績向上につながっている。生徒にとって、少しでもより良い進路実現のきっかけにしたいと思い、本校で取り入れた。今回はその実践を報告する。

2　ねらいと期待する効果

他者の話をよく聞き、どのような相手に対しても自分自身の考えを整理し、分かりやすく表現できるコミュニケーション能力と、一つの物事に対して没頭することができる探究心を育て、希望進路を実現させる。

3　実践内容（令和４年度　第２学年）

総合的な探究の時間で各学期において「哲学対話」を実施した。

(1) 哲学対話とは

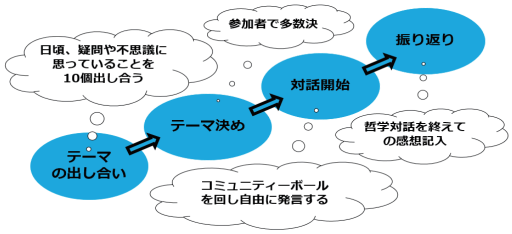
ア　授業形態

1960年代にアメリカで始まった「子どものための哲学（Philosophy for Children：P4C）」に由来している。哲学者の思想について教えるのではなく、参加者それぞれが、日頃、疑問や不思議に思っていることなどを出し合う。司会（ファシリテーター）と参加者たちがその中からテーマを決め、そのテーマについて話し合う。机はなく、椅子で輪になり教師も生徒の中に入る。発言の強制や指名などはなく、コミュニティボールと呼ばれる球を回して、発言したい人は手を挙げてこのボールをパスしてもらう授業形態である。この実践を通して生徒たちの探究心を育てた。

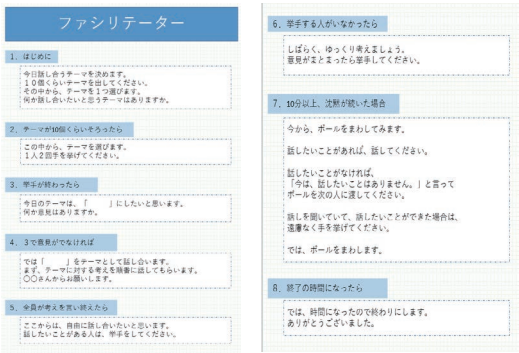
イ　ルール（以下の八つ）

①何を言ってもよい
②人の言うことに対して否定的態度を取らない
③互いに問いかけるようにする
④発言せず、聞いているだけでもよい
⑤知識ではなく、自分の経験に即して話す
⑥意見が変わってもよい
⑦話がまとまらなくてもよい
⑧分からなくなってもよい

【授業風景】



【授業の流れ】



ファシリテーター

1．はじめに
今日話し合うテーマを決めます。
１０個くらいテーマを出してください。
その中から、テーマを１つ選びます。
何か話し合いたいと思うテーマはありますか。

2．テーマが10個くらいそろったら
この中から、テーマを選びます。
１人２回手を挙げてください。

3．挙手が終わったら
今日のテーマは、「　　」にしたいと思います。
何か意見はありますか。

4．３で意見がでなければ
では「　　」をテーマとして話し合います。
まず、テーマに対する考えを簡単に話してもらいます。
○○さんからお願いします。

5．全員が考えを言い終えたら
ここからは、自由に話し合いたいと思います。
話したいことがある人は、挙手をしてください。

6．挙手する人がいなかったら
しばらく、ゆっくり考えましょう。
意見がまとまったら挙手してください。

7．10分以上、沈黙が続いた場合
今から、ボールをまわしてみます。
話したいことがあれば、話してください。
話したいことがなければ、
「今は、話したいことはありません。」と言って
ボールを次の人に渡してください。
話しを聞いていて、話したいことができた場合は、
遠慮なく手を挙げてください。
では、ボールをまわします。

8．終了の時間になったら
では、時間になったので終わりにします。
ありがとうございました。

【授業プリント】

ウ　実際のテーマの紹介と説明

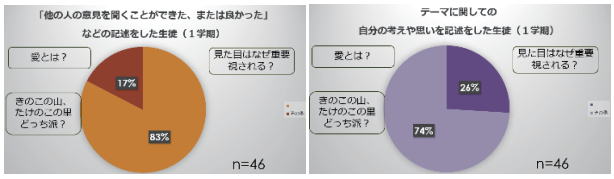
・愛とは？　・見た目はなぜ重要視される？
・なぜ、ノートをとらないといけないのか？
・男と女どっちが得？　・校則は何であるのか？
・遅刻と欠席はどちらが悪い？

以上のようなテーマで、答えがないものを深く考えることが目的なので思考力を重視し、結論を出すことにこだわらない。

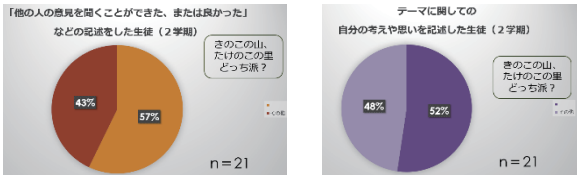
4　実践の結果（令和４年度　第２学年）

(1) 生徒の記述の分析

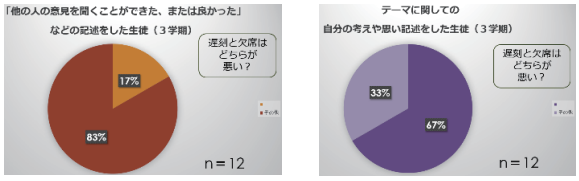
「他の人の意見を聞くことができた、または良かった」などを記述した生徒と、テーマに関しての自分の考えや思いを記述した生徒に絞り分析を行った。１学期に関しては２クラス分を合計して分析を行った。



【１学期の生徒記述の分析：２年Ｂ組（25 人）＋Ｄ組（21 人）】



【２学期の生徒記述：２年Ｄ組（21 人）】



【３学期の生徒記述：学級混同（12 人）】

初回の段階では、他者の意見を聞くことに重きを置き、学期が進むにつれてテーマに関する自分の考えや思いを記述する生徒が多い。

(2) 授業ビデオの分析

ア　普段、無口な生徒が発言しているなど、意外な発見があったこと。

イ　日常の何気ないことに対しての生徒の着眼点を知ることができ、生徒理解にも繋がる可能性を感じたこと。

ウ　授業が終わった後も話合いをしていて、生徒自ら主体的な活動をしていたこと。

(3) 教職員間の振り返り

【教職員間の振り返り】

5　今後の展望、課題

(1) 今後の展望（令和５年度　第３学年）

現在、令和５年度総合的な探究の時間で「卒業研究」を実施している。１年間を通して自分自身で疑問を持ち、問いを立てて論証していく。自分で新しい問題に挑戦し発見する面白さを実感させるよう工夫しながら、生徒の探究心を育てている。２学年で実施した「哲学対話」を発展させ、クラス全体の活動から、個人の探究活動につなげている。最終的には、生徒が自分なりに解答を得て、作品として完成させる予定である。生徒には、就職での面接や大学入試の総合型選抜にも対応できることをしっかり伝え取り組ませている。高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説総合的な探究の時間編に記載の「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」を意識させている。

(2) 今後の課題

ア　記述分析の有意性

イ　生徒の質的変化に関しての調査

ウ　発言や記述から読み解く探究の評価

エ　総合的な探究の時間における評価の方法（主体的に取り組む態度に関して）

オ　哲学対話と進路実績の関係性に関しての調査

6　おわりに

同学年を担当する教員で共通理解を図り、取り組んでいるため進路実績が向上する傾向にある。進学面では推薦入試における実績で、今までは合格が難しいと思われた大学の合格者が現れ、就職面では大手企業の内定をいただいている。今後も「哲学対話」を取り入れた授業を実践し、生徒にとってより良い進路実現のきっかけにしたいと考えている。さらに、同様の課題を持つ他の埼玉県の高等学校の一助になれば幸いである。

7　参考文献・引用文献

・東京大学教授　梶谷真司．“「『考える力』を育てる『哲学対話』」（視点・論点）”．NHK. 2020. https://www.nhk.or.jp/kaisetsub-log/400/426694.html

・石井栄子．“広がる対話”深まる対話“高校実践事例　Case ４大山高校（東京・都立）”．リクルート進学研．2021 ．https://souken.shingakunet.com/secondary/2021/05/case4.html

・東京大学教授　梶谷真司．“探究学習と哲学対話”．数研出版．2020 年．AGORA 73 号．https://www.chart.co.jp/subject/shakai/agora/73/agora73-1.pdf

これからのAI時代におけるプログラミング教育

普通科高校の情報の授業において micro:bit を用いたプログラミング作品制作の演習を実施した。コーディングスキルの習得に終始せず、生徒の自由な発想・自発的な活動を重視することで、これからの社会に通ずる問題解決能力の育成に繋がると考えている。

県立北本高等学校　教諭　坪井（つぼい）　啓明（ひろあき）

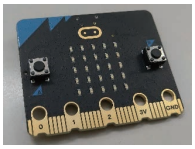
1　はじめに

ChatGPT が公開されてから１年が経った今、生成 AI の発展と活用が目覚ましい。プログラミング分野においても、既に典型的なプログラミングであれば AI ができる時代になった。この現代あるいは近い将来において、身に付けるべきプログラミングの技術はコーディング力ではなく、プログラムで「何を作りたいのか」というビジョンを明確に持つことだと考える。ビジョンが先にあり、AI に対して的確な指示を出し、AI が出力したコードと完成形のビジョンと比較して足りない点を更に指摘していくことで、AI をアシスタントとしたプログラミングが可能となる。そして、このビジョンを持ち、それを実現する力は、たまたま AI が流行している今だけではなく、これからの高度情報化社会と Society5.0 においても普遍的に重要な力である。

このビジョンを育むためには、生徒の自発的な活動が肝要である。教員から「これを作りなさい」と与えられるのではなく、生徒自身から「これを作りたい」という意欲が生まれ、実行し、さらに「もっとこうしたい」と改良を重ねることで、ビジョンを持ちそれを実現する力が育つ。このことはプログラミング分野に限らず、他人事でなく自分事として捉えるべき問題解決全般にも同じことが言える。

2　授業計画

本校は、普通科で１学年必修の情報Ⅰ（旧課程：社会と情報）と３学年選択の情報の科学（新課程：情報Ⅱ）が設置されている。今回は３学年選択科目（今年度の受講者は８名）において、マイコンボード micro:bit を用いたオリジナル作品の制作演習をプログラミングと問題解決の単元として実施した。演習では基本知識を学んだ後、一人一作品を制作し、最後に制作したものについてプレゼンテーションと質疑応答を行う。演習の過程では生徒の自由な発想・自発的な活動を重視した。なお、プログラミング演習としては、昨年の同時期に micro:bit と３Ｄプリンタを使ったイルミネーション作品制作、毎年１学年必修の授業で Scratch を用いたオリジナルゲーム作品制作なども行っているが、本報告では割愛する。



【図１　micro:bit】

授業計画は次表のとおりである。オリジナル作品を考えさせる際には、作品例として「開けると光り音が鳴る宝箱」は見せたが、課題指示は「micro:bit を使ってオリジナルで何か作ろう」と、あえて抽象的なものしか出さずに自由な発想を求めた。

時数	内容
４時間	演習 micro:bit 基本機能
２時間	座学 ハードウェア（センサ、論理回路等）
４時間	オリジナル作品制作
２時間	プレゼンテーション準備、予備
１時間	プレゼンテーション発表
１時間	振り返りとまとめ

【プログラミング教育の授業計画】

3　教科情報としての演習の目標

(1) プログラミングへの理解

身の回りのあらゆる物にコンピュータが積まれプログラムで動いている現代において、それらがどのように動いているのかを理解することは全ての人にとって重要である。画面の中で完結するプログラミングは１年必修の授業でも扱っているが、今回はセンサや LED を使ったハードウェア面を扱うことにより、より発展的に身の回りの仕組みに対する理解を深めさせることが目標の一つである。

(2) 新たな価値の創造

学習指導要領における「情報Ⅰ」と「情報Ⅱ」の目標では、「新たな価値の創造」という文言が加わる点が特徴的である。１学年必修の情報では教員の想定内の作品でも十分だが、３学年選択の情報ではやはり創造性を求めたい。今回は教員の発想や期待を超えたものが生徒から出てくることを期待して実施した。

また、真に創造的・独創的なものでなかったとしても、生徒自身から生まれる発想はものづくりの視野を広げることに繋がる。プログラミングという行いは職業プログラマだけのものではなく、より身近で日常的なものである。その点について、創造的な気づきや楽しみを見出せることも目標の一つである。

(3) 対話的なプレゼンテーション

プレゼンテーションにおいて最も重要なことは、原稿でもスライドでもなく、何を話すかとい

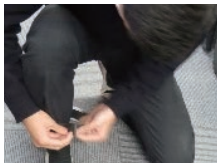
う内容・中身と、それを聴衆にいかに伝えるかである。今回の授業ではいわゆる調べ学習等とは異なり、全て自分で考えて制作したものを説明するため、話すべき内容は全て生徒自身の内にある。そこで生徒にはあえて「原稿は作らないでその場で話す」という指示をした。また、聞き手側もただ聞くだけでなく、必ず質疑応答をするよう指示した。これにより、対話的なプレゼンテーションとなることを目指している。

4　実施結果と制作物

授業を実施した結果、多岐にわたるアイディアの作品が作られ、プレゼンテーションと質疑応答も大いに盛り上がった。生徒の制作した作品の内、印象的だったものをいくつか紹介する。

(1)『Go！シャトルラン』

本体を脚に巻きつけて使い、加速度センサから走行中かを判定し、徐々にテンポが上がるシャトルランの音階を鳴らし続ける。体育の授業に取り組んでいる生徒ならではの発想といえる。



【図２　生徒作品 (1)】

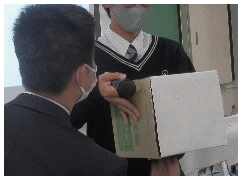
(2)『レーザーソード』

SF 映画が好きな生徒が、作中の光の剣をフルカラーLED の色や振った時の音などで再現したもの。ペンライトの発想自体はよくあるものだが、モチーフが明確なため色の選定や音など随所にこだわりが見られ、プレゼンテーションの質疑も盛り上がった。

【図３　生徒作品 (2)】

(3)『ハテナブロック！？』

ゲーム「スーパーマリオ」のブロックを再現し、叩くことで内部の本体が振動を検知、複数種類のアイテムを表現した光と音がランダムに再生される。ごく低確率で再生されるものがあるなど生徒目線からの遊び心も面白いが、動作テストを繰り返す中で、本体は底面より天面に設置した方がセンサの誤作動が少ないことを発見する等、探究的な学びも生じていた。



【図４　生徒作品 (3)】

これは所属クラスの文化祭企画モチーフがマリオで、双方向性のある装飾を作りたいというアイディアから作られた。文化祭には最終的に間に合わなかったが、プログラミングの選択肢があることで新たな視点でのアイディアが出されたことは大変好ましく思う。

5　生徒アンケート結果

プレゼンテーション後、まとめの話をする前に行った生徒のアンケート結果を掲載する。いずれも質問項目は「４とてもそう思う」～「１全くそう思わない」の４段階である。

	4	3	2	1
micro:bit を使った制作活動は面白かったか	100%	０%	０%	０%
プログラムで動く身の回りのものの仕組みを説明できるか	12.5%	87.5%	０%	０%
プログラミングで学んだことは自分の将来に役立ちそうか	75%	25%	０%	０%
将来、プログラミングに関わる仕事につきそうか	25%	０%	75%	０%

このように、大変好評な結果であった。また、当初のねらいどおり「プログラマになるわけではないが、プログラミングの学習はとても役立ちそう」と考えている者が多いことは興味深い点である。

6　課題と今後の展望

期待以上の姿を見せてくれた今回の演習だが、課題点もある。例えば基盤本体から出力できる単音でメロディを再生する作品を制作した生徒が複数名いたが、かけた時間のわりに凡庸な作品となってしまった。これは、小中学校も含めてこれまでにプログラミングやハードウェアを触る経験が少なかったために、命令とおりに光る・音が鳴ることで満足してしまったのだと思われる。それもまた重要な経験ではあるが、将来的には小中学校などより早い段階でその経験を済ませ、高校段階ではインタラクティブ性等に注目できるようになることが望ましい。

また、基本機能の学習では通信機能も扱っているが、今回はその機能を使ったアイディアは出なかった。ビジョンを持つためにはまず使いこなせる知識技能が必要であり、知識を教えるべき部分と生徒の自主性に任せるべき部分とのバランスは難しい。

7　まとめ

共通テストなど教科「情報」でも正解のある問いが注目される今だが、今回は生徒の自由な発想と自発的な活動を重視することで、目標に向けて試行錯誤を繰り返して形にしていく探究的な生徒の姿を見ることができた。こういった、自身の内に完成形のビジョンを持ち実現していく正解のない活動で得たものこそが、AI 時代において人間に最も重要なものであると確信している。目まぐるしく変化・発展していく世の中において教科「情報」の役割も変わっていくが、引き続き生徒の内の自由な発想を軸にした活動を実施していきたい。

学校における消費者教育の現状と課題

～18歳で大人になるまでに生徒が必要な知識や経験を身に付けるために～

県立浦和商業高等学校教諭・埼玉県消費生活支援センター長期研修生　青木（あおき）　由紀子（ゆきこ）

はじめに

現代社会において、「消費者教育」は生徒たちが持つべき不可欠なスキルの一環となっている。商品やサービスの選択、価格の判断、情報の信頼性の評価などのスキルは将来の社会での生活において重要である。現実の社会で賢明な消費者として行動するために、学校における消費者教育は重要な役割を担っている。

1　成年年齢の引き下げ

民法改正に伴い、2022年４月から成年年齢が18歳に引き下げられた。既に実施されていた選挙権年齢の引き下げと相まって「18歳で大人になるまでに、どのような資質・能力を身に付けておくことが必要か」の観点から、国は消費者教育の推進に関する基本的な方針を制定し、今回の学習指導要領では家庭科や公民科をはじめ各教科の目標・学習内容が系統的に整理され、高校家庭科で金融教育、公民科では「公共」が設置されるなど、大幅な改訂が行われた。しかし、18歳に必要な資質・能力は高等学校の個別の教科の学習のみで身に付くものではない。そこで、教科横断的、また小中高の学校教育を通じた様々な場面での系統的な消費者教育の実施が必要となる。

18歳で成年に達すると一人で有効な契約が締結できるようになり、大人として扱われるため、可能性が広がる一方、未成年者取消権を行使できなくなる。つまり高校３年生では教室内に、契約を取り消せる生徒とそうでない生徒が生じることを踏まえ、教員も基本的な知識を身に付けるなど、指導力の向上が必要である。

【『「消費者教育の取組について」文部科学省（R3.4.23）』より抜粋】

2　若者の特徴と消費者教育の目標

若者は、進学や一人暮らし、就職や結婚等をきっかけに様々な契約を締結する必要が生じるが、知識や経験不足、経済的余裕のなさ、コミュニケーションに対する苦手意識を始め、様々な脆弱性を抱えている。こうした脆弱性に付け込まれ、消費者トラブルに巻き込まれるケースは少なくない。高等学校を卒業すると、消費者教育を受ける機会は減少する一方で、被害の増加や場合によっては加害者となることが問題となっている。成年を迎える前に知識や経験を積んでおくことは将来のトラブルを未然に防止し、社会に参画する入口段階での深刻な経済的損失を避けることにつながる。

順位	20歳未満		20歳代	
	商品・サービス	件数	商品・サービス	件数
	総件数	21,827	総件数	85,267
1	インターネットゲーム	4,466	エステティックサービス	12,501
2	他の化粧品	1,714	不動産貸借	6,202
3	エステティックサービス	1,382	他の内職・副業	4,101
4	他の健康食品	1,325	商品一般	4,071
5	商品一般	1,051	異性交際関連サービス	2,692
6	アダルト情報	884	フリーローン・サラ金	2,337
7	異性交際関連サービス	587	役務その他サービス	2,217
8	他の内職・副業	391	四輪自動車	1,740
9	他の娯楽等情報配信サービス	379	電気	1,724
10	基礎化粧品	333	医療サービス	1,340

【消費生活相談の商品・サービス別上位件数
「R5年度版　消費者白書」より抜粋】

消費者教育推進の目標は「被害に遭わない消費者、合理的な意思決定ができる消費者の育成にとどまらず、消費に関する行動を通じて、一人一人が社会の一員として、より良い社会発展のために積極的に関与する消費者の育成（消費者市民社会の形成に参画）」を目指している。例えば環境や社会、人権などに配慮した商品やサービスを選択する、不公正な事業者と取引しない、泣き寝入りせず消費生活センターに相談するなど、知識を習得し適切な行動に結びつけることができる実践的な能力を育むことが重要である。消費行動は自分だけでなく、現在から将来にわたって、環境にも影響を及ぼし得るものであり、社会とつながっているという自覚を生徒に持たせ、発達段階に応じた消費者教育を行うことが重要である。※この点については

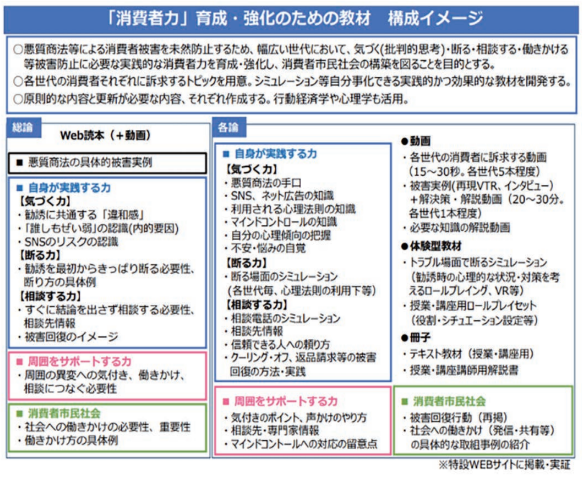
「消費者教育の体系イメージマップ」が参考になる。

また、近年の社会情勢の変化として、デジタル化の進展なども消費生活・消費行動に大きく関わっている。接する大量の情報に対する批判的思考力や、情報モラルを含め適切に情報の信頼性を判断しオンラインでの取引などを行う、デジタルリテラシーを身に付けることも重要である。

3　消費者教育の変遷と取組

制度として 2009 年に消費者庁が設置され、2012 年に消費者教育推進法が制定された。そして、前述のとおり、成年年齢の引き下げや学習指導要領の改訂により、消費者教育の充実が図られた。特に高等学校においては関係４省庁（消費者庁・法務省・文部科学省・金融庁）が「若年者への消費者教育の推進に関するアクションプログラム」を作成し、学習指導要領の徹底や教材の開発・手法の高度化、実務経験者の活用、教員の養成・研修の充実などが挙げられた。消費者庁は、各都道府県の全高等学校で、2017 年に作成した「社会への扉」を活用した授業を実施することを推進してきた。また、全都道府県に消費者教育コーディネーターを配置することを目標とし、教員研修や教員養成課程においても消費者教育に関する内容の充実が求められてきた。

さらに、2022 年 10 月に「消費者力」育成・強化ワーキングチームが設置され、新たな教材開発が行われている。「社会への扉」は基本的な「消費生活に関する知識を習得」することを目指した教材であり、教材内で扱っている消費生活に関するクイズの正答率が 10 歳代において比較的高くなるなど、一定の成果をあげていると考えられる。次の段階ではこうした知識を「適切な行動に結びつけることができる実践的な能力」として育むことが目標とされている。



【『「(消費者力）育成・強化ワーキングチームについて（報告）」消費者庁（R5.2.27)』より抜粋】

私自身も学校での消費者教育の授業で、外部講師の活用やロールプレイングを取り入れるなど、一方的な知識・伝達にならないよう工夫しているが、生徒への知識の定着や自分事として捉えるまで至ることの難しさも感じており、新たな教材の公表と現場での活用に期待を寄せている。

4　まとめと今後の課題

消費者教育の推進に関する基本的な方針に「学校においては、教育活動の全体を通じて、児童及び生徒の発達段階に応じた消費者教育を推進する（中略）学校の教職員には、消費者教育の推進役としての役割がある」とある。

しかし、学校には消費者教育を専門とする教員がほとんどいないのが現状で、日々の業務に追われ手が回らないなど教員が学校で消費者教育を十分に展開することには限界がある。そのため、消費生活センターなどを媒介とした外部講師など学校外の専門家（消費生活相談員、FP、弁護士など）や、各省庁や企業から出されている既存の教材を活用することも一つの解決法として考えられる。

今はまだ、現場の教員も手探りの状況であるが、学習指導要領で充実された消費生活に関する学習内容が確実に実施され、生徒の消費者としての適切な行動に結びつくよう、学校種間・教科等の連携を図る必要がある。さらに、消費者行政や専門家の知見を学校の現場につなげていき、消費者教育の体制を構築していくことが重要な課題となっている。

また、その他の消費生活と関連する教育（金融経済教育、法教育、情報教育、環境教育、食育、国際理解教育、主権者教育、キャリア教育など）に関する施策との有機的な連携を図ることも求められている。これらの教育と消費者教育の関係に着目し、それぞれの教育を推進することにより、相乗効果をもたらす取組を進めていくことも望まれる。

(消費者教育の参考となる HP 等)

●消費者教育ポータルサイト
●消費者教育支援センター
●国民生活センター
●埼玉県消費生活支援センター
●埼玉県教育委員会　消費者教育

【消費者ホットライン 188】

消費者庁や国民生活センターでは、成人を迎えたばかりの 18・19 歳が被害に遭わないように若者への注意喚起を掲載しているウェブページを特設している。

●消費者庁「18 歳から大人」特設ページ
●国民生活センター「若者の消費者トラブル」

「ひらこう！　ちちこう！」で始めた地域にひらく探究活動の歩み
～本校の地域探究の取組についての活動報告～

県立秩父高等学校　教諭　田中（たなか）　里奈（りな）

1　はじめに

本校は、創立116年を迎える秩父地域唯一の普通科高校である。今年度から県の「県立高校学際的な学び推進事業」の指定を受け、地域と協働しながら探究活動を行っている。秩父地域には伝統的な文化や豊かな自然があり観光資源にあふれており、地域と連携することで魅力的な活動ができることが期待される。

今年度赴任した私は１、２学年の総合的な探究の時間のカリキュラムをゼロベースから作りながら実践するという役割を担っており、現在進行形で探究活動の土台形成をしている。その途中経過を報告する。

2　カリキュラム作成のねらい

探究学習の中で地域との連携を図るにあたって私がまず中心に置いたテーマは、『生徒が学外の人と関わる機会を多く作る』ということであった。そこで、探究活動では「ひらこう！　ちちこう！」をキャッチフレーズとし、折に触れ外部との連携と協働の機会を探った。各学年の年間の内容は以下のとおりである。

〔1年〕	1学期	オリエンテーション 分野別対話会＋発表　他校との交流
	2学期	他校との交流＋発表
	3学期	チーム探究に向けたテーマ決め
〔2年〕	1学期	オリエンテーション　分野別対話会 チーム探究に向けたテーマ決め
	2学期	チーム探究　中間発表会
	3学期	チーム探究　最終発表会

★１、２年　分野別対話会：６分野（観光／伝統文化／ものづくり／食・農業／自然・環境／まちづくり）に関わる市内の大人の方を招き、講話と質疑応答で対話をするイベントに７名の方にお越しいただいた。

★１年　他校との交流：６か所の交流先（島根県立隠岐島前高校、島根県立津和野高校、富山県立氷見高校、秩父市立花の木小学校、秩父市立高篠小学校、オーストラリアロビーナハイスクール）との交流＋独自の地域紹介をする発表を行った。

★２年　チーム探究：６分野（上記と同じ）でチームを組み、秩父の課題解決を目指す仮説・検証を行う。夏休みには各チームでアポを取り秩父地域各所でフィールドワークを行った。

個人的には人脈のない地域ゆえ苦労もあったが、他地域の学校関係者や秩父地域の新たな協力者の力添えを得て、交流先の確保や講師やゲストとしての来校者の依頼、大学生に活動補助などにも来てもらうことができた。生徒との交流に来校してくださった地域の方は、今年度ここまでのべ50名を数える（12月現在）。

【５月　分野別対話会での秩父銘仙についての講義】

3　取組の様子

（1）１年生の探究活動

１年生は、６か所の交流先とそれぞれ対面／オンラインで交流機会を設け、「秩父の魅力を発信する」という共通の課題を交流相手に合わせてアレンジするというテーマで２学期の授業を行った。オンラインで他県の高校生の様子を聞いたり、実際に訪問して地元の小学生と交流したり、来日した姉妹校のオーストラリアの高校生を連れて英語で街案内をしたりとまず相手のことを知る交流を実施し、その相手をイメージしながらプレゼンの準備を行う。

発表では、「交流相手の高校がある島には温泉がないから、秩父の温泉について紹介をした」「小学生に楽しんでもらえるように、クイズ形式にした」「英語のプレゼンテーションでは、字幕をつけた」など相手を意識した工夫が見られた。連携した小学校からも「小学生にとっても有意義な場となった」と好評であった。他県の高校生への発表グループは、相手の高校の発表も参観し大きく刺激を受けた生徒も多く、これからの地域探究へ弾みがついた。

【９月　１年海外交流チームの秩父の街案内】

【10 月　１年地元小学生への発表】

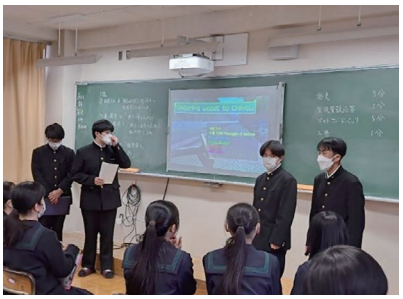
【11 月　１年他県高校生へのオンライン発表】

(2) ２年生の探究活動

２年生は、夏休みに向けて自分たちで電話をかけて訪問のアポをとり、各自でフィールドワークを行った。電話をかけることはもっと尻込みするかと予想していたが、想像以上に意欲的に自分たちで様々な企業や団体を見つけてきては連絡をしていた。中には数件断られてもめげずにアタックする姿も見られ、たくましさを感じた。その訪問から、連携して商品の販売の話にこぎつけたり、イベント参加の機会を得たりとその先のステップにつながったチームも出てきた。学校で用意した予定調和の交流先ではなく、生徒自らが切り拓いた関係性を深めて活動をしていることに非常に価値を感じる。中間発表の段階では道筋が見えて活動が進んでいるチームばかりではないが、他チームの取組を目の当たりにしたりゲストからのアドバイスに刺激を受けたりし、後半に向けて実践に取り組むチームが増えていく兆しが見えた。

外部の方との交流は生徒にとって刺激が多く、講演会や発表会の後には「今まで知らなかった地域のことを知ることができた」「ゲストの方のフィードバックで得たアドバイスを今後の活動に取り入れていきたい」といった前向きな感想が続く。また、生徒が自ら個人的にゲストへ詳しく話を聞きに行くような様子も見られた。このような活動の積み重ねを通して、生徒は徐々に外部の方との交流に慣れてきたように思う。

しかし、主体的な活動ゆえチームごとに進捗の濃淡があること、発表の際に他チームへの質問がなかなか出ず批判的思考力に課題があることなどが浮き彫りになった。３学期に向け、改善を働きかける授業づくりを目指す。



【11 月　２年中間発表会　生徒の発表】

【11 月　２年中間発表会 ゲストのフィードバック】

4　今後について

３月に予定している２年生の最終発表会には、保護者、県内の教育関係者、そして地域企業や行政の方など更に多くの地域の方に本校の学びを「ひらき」、見ていただきたいと考えている。生徒は、外部の方にも見てもらえる機会によって程よい緊張感を感じ、準備に向かう意欲も向上しているようだ。『相手意識』があることによるモチベーションアップの効果は絶大である。毎回の授業内容は生徒の様子を見ながら微調整していくスタイルで、初めての取組で手探りな分フットワーク軽くよりよい授業にしていくことを目指す。また、授業を実践する我々教員側が探究的な視点を持つことや生徒の伴走支援について学んでいくことを推進するため、定期的な教員研修を行い、学年会などで情報交換を密にすることで、学校全体で探究学習に取り組める体制を構築していきたい。

地域との協働で生きる力を育む
～越生高校「9限目の教室」プロジェクト～

県立越生高等学校　教諭　堀江（ほりえ）　寛将（ひろまさ）

photo by 戸井田 夏子

1　はじめに

本校では、新科目「総合的な探究の時間」を組み立てていくにあたり、前任の岩﨑望教諭（現坂戸高校）が本校地域コーディネーターの岡野正一氏（次ページで原稿を執筆いただいた）に協力を要請し、二人三脚で年間計画を作成してきた。十数回にも及ぶ準備会議を重ねる中で、本校の課題を非認知能力の育成と捉えてその育成に努めること、学校・地域等との連携を促進することとした。

2　プロジェクト名「9限目の教室」とは

9限目の教室

□大人へ成長していく「原点」になる
□たくさんのホンモノに「出会う」
□原動力＝君たちの「想い」

「総合的な探究の時間」における本校のプロジェクト名を「9限目の教室」という。週1時間のこの授業は、子供から大人へ成長していく過程でありたい。ここで完結するわけではなく次のステージ（卒業後）が本番であり、本番へ向けた準備の授業と位置付ける。10という二桁の数字を大人や完成形と見立てるならば、その一つ前の時間という意味を込めて「9限目の教室」というタイトルにした。多くの本物に触れ、生徒の価値観を広げたい想いがある。

3　令和5年度の主な取組

日付	タイトル　／　講師職場
6/15	すべてのモノには魅力がある　／　TSUMUGU Studio
	暮らしの中にあるドローン　／　ジュンイメージサービス
6/22	学校のものでテント設営に挑戦　／　株式会社 NONIWA
6/29	すべてのモノには魅力がある　／　TSUMUGU Studio
	最先端の AI で作るデザイン体験！　／　株式会社 温泉道場
	馬のところにお邪魔します　／　ときがわホースケアガーデン　乗馬クラブアイル

1学年では、地域の方をゲストティーチャーとして招き、様々な角度から生徒に講演やワークショップを行っていただいた。実践の内容は表のとおりである。授業を作成するにあたり、講師と地域コーディネーターと本校職員で打合せやプレ授業を行い、授業の狙いを明確にしていくことを心がけた。

滑川町でプロのカメラマンとして活躍されている戸井田氏の「すべてのモノには魅力がある」では、自己肯定感が低い生徒が多い中で、相手の魅力を感じ取り、自分が良いと思った表情やポーズを撮影するワークを通じ、自分に自信を持てるきっかけづくりをした。

【戸井田氏のワークの様子】

【オンライン合同授業の様子】

2学年では、NPO法人カタリバの「学校横断型探究プロジェクト」に参加し、個人の「My テーマ」で探究の進め方を学んでいる。オンライン上ではあるが、他校の生徒とつながることで多様な価値観に触れることができ、学校内では得られなかった考え方やものの見方を学ぶことができる貴重な機会である。

4　“自走”し始める生徒たち

【村田氏の個展会場での交流】

左の写真は越生町で木工家具職人として活躍されている村田氏が令和4年度に開催した個展会場に生徒が“自走”して訪れたときの様子である。令和5年度では馬ふん和紙にイラストを描いて販売するプロジェクトや小川元気プラザでのボランティア活動へ参加するなど着々と生徒の地域での活躍の場が広がりつつある。

5　おわりに

「9限目の教室」の取組が始まって2年目ということもあり、課題は山積している。この取組を通して目指す生徒像が何か、もう一度原点に立ち返って、生徒と一緒に大人も探究し、「9限目の教室」を育てていきたい。

地域が関わる９限目の教室

～一人の生徒を応援することから始まった学校との関わり。手を動かす、足を動かす、身体を動かす、心が動く。～

県立越生高等学校　地域コーディネーター　岡野　正一

背景

家業はときがわ町で 100 年続く小売りを営んでおり、私はその４代目です。高校演劇から始まり舞台映像などの表現活動を 30 年近く行い、現在はコンビニ経営を中心に地域×教育×福祉の領域で活動を行っています。当校での「総合的な探究の時間」サポートもその一環です。

１　出会いとはじまり

表現活動をいったん区切り、コンビニ経営に取り組んでいく中で驚いたのは、従業員を通して知った「課題」と「格差」です。我々が一番気になったのは、子供たち本人にはどうすることもできない大人都合で被るネグレクト、家庭環境、教育機会の喪失、経済的な格差などの課題です。本当に多くの方がそうした課題の中にいることを知りました。その中で当事者となる生徒とその生徒を支援する岩﨑先生と出会いました。この一人の生徒を学校（先生）と地域（職場）と行政（福祉）で３年支えた経験が我々の原点になっています。

２　総合的な探究の時間

令和３年の秋、上記の岩﨑先生から相談を受けて、手探りの中で「総合的な探究の時間」の授業づくりをはじめました。全く未経験の分野のこともあり遅々として進みません。それでも諦めず、話し合いながらどういった授業がいいのか？　先行事例はどういったものがあるのか？　うちの課題はどこにあるのか？　など話していきます。令和４年度は１年生へのプレ講義を含めると地域から８講師を招き 11 講座を行うことができました。

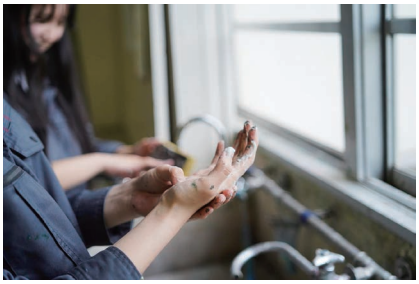
【写真１　ストラップ作製の講義：村田さん（木工職人）】

３　2年目 PBL(project based learning) への挑戦

【写真２　講師：武藤さん（デザイン）と校内見学と打合せ】

令和５年度は岩﨑先生の異動を受けて、２年生は堀江先生、飯田先生、１年生は八木原先生、田沼先生の運営となりました。２年生は NPO カタリバが提供する小規模校連携のプログラムを中心に課題解決型学習へ挑戦しています。１年生の前半では昨年同様に地域から講師を招き講座を作っていきます。今年度は６名の講師を招き、９講座を行いました。夏休みは接続した講師の方数名が課外授業として来校し特別講義をし、また職場（養老牧場：ときがわホースケアガーデン）へ訪問し校外学習の場として協力していただきました。２学期には 20 グループに分かれテーマに沿ってミニ PBL を行いました。初めてということもあり生徒たちはどう取り組むか苦労していました。今後もプロセスを経る中で課題を発見し、手を足を身体を動かして学びの中へ進んでいってほしいです。

我々は皆さんと関わり、心を動かされています。「学びは楽しい。」忘れていたことを思い出させてもらいました。



【写真３　手を洗う生徒】

all photo by 戸井田　夏子

教頭間連携で取り組む県立高等学校の魅力発信
～ICTを活用した「熊谷モデル」による生徒募集の実践～

学校の魅力を発信する「生徒募集」は、いずれの高等学校においても大きな関心事である。従来の学校単独での取組に加え、ICTを活用した学校間連携によるPRポスターの作成及び地域機関と連携したその周知についての新たな実践を報告する。

県立熊谷女子高等学校　教頭　松下（まつした）　奈緒子（なおこ）

1　はじめに

熊谷市には伝統ある７校の県立高等学校（以下､「高校」とする）があり、地域から信頼され、地域に根ざした学校として、各校の「教育目標」･「目指す学校像」の実現に向けて教育活動を行っている。それぞれの魅力発信についても、学校ホームページの活用や学校説明会等により創意工夫をしながら、生徒募集に取り組んできた。

一方で、北部地区の中学生数の減少や、他地区の県立高校や私立高校など多くの選択肢がある中で、特に北部地区の中学生に、地元である熊谷市内の県立高校を進学先として選んでもらう方策を考えることは喫緊の課題である。

この課題の解決に向けて、令和５年４月の熊谷ブロック校長会において、新たな生徒募集の方策として「チーム熊谷」で次のことに取り組むことが企画された。

①各校の学校説明会等において、市内７校の「学校案内」（生徒募集用パンフレット）を配架すること。

②市内県立高校の魅力をPRするポスターを作成すること。

これを踏まえ、市内７校の教頭が連携し、６月に開催される学校説明会に間に合うよう、５月末までに上記の実現に取り組むこととなった。

2　ICTを活用した教頭間連携

本実践ではICTを積極的に活用した。種類及び方法を先に述べる。

(1)Zoomチャットの活用

教頭間連携を進めるにあたり、頻繁に対面で打合せを行うことは難しいため、連絡ツールとしてZoomチャットを活用した。埼玉県の県立学校では、管理職に付与されているアカウントをZoom有償版でも利用している。Zoomチャットの活用はメッセージのやり取りに加え、資料共有においても非常に便利であった。

(2)Google Jamboard・Googleスライドの活用

埼玉県の県立高校教員には個々にアカウントが付与され、ICTを用いた教育活動において活用している。このため、各教頭のもつアカウントを使い、共同編集機能のあるGoogle Jamboard及びGoogleスライドにより、PRポスターを作成することとした。

3　PRポスターの作成

(1)Google Jamboardを活用した思考整理・アイデア共有

PRポスター作成のねらいは、熊谷市内の県立高校について中学生やその保護者に興味をもってもらうこと、ポスターをきっかけとして各校の学校説明会に参加をしてもらうことである。限られた大きさで作成するポスターには、中学生にPRしたい内容を精査して盛り込む必要がある。このため、まずアイデア出しとして、各校教頭で　①県立高校の魅力　②自校の強み　等について、Google Jamboardの付箋機能を使い、書き出しをした。Google Jamboardは付箋を自由に動かすことができるため、思考整理が行いやすい。

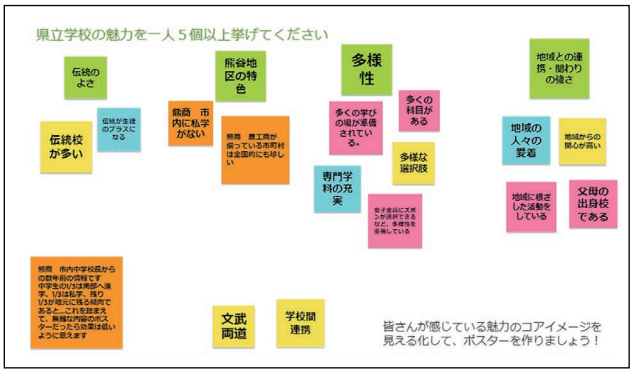
挙げられた県立高校の魅力をカテゴリー別に分類したところ、「伝統」や「地域とのつながり」などに加え、熊谷市内の県立高校の大きな魅力は「多様性」であることが見えてきた。

市内には、次の県立高校がある。

「熊谷高校･熊谷女子高校･熊谷西高校･妻沼高校･熊谷農業高校・熊谷工業高校・熊谷商業高校」

男子校、女子校、共学校、農業・工業・商業の専門高校を有する市町村は県内でも数少ないため、これは熊谷市にある県立高校の大きな特色であり、この魅力を大きく伝えるポスターを作成するものとした。

次に、ポスターに掲載するキャッチフレーズ案を､同様にGoogle Jamboardに挙げてもらった。「熊谷にトライ」「熊谷で見つける、色とりどりの未来」など、熊谷がラグビータウンであることを関連させた案や、多様性を色に例えた案など、多くの良いアイデアが出された中で、「母校が必ず見つかる街　熊谷」に決定した。短い言葉の中に多様な選択肢があることが示されており、中学生にメッセージが伝わりやすいキャッチフレーズであると思う。



【Google Jamboard による思考整理・アイデア共有】

(2)　Google スライドによるポスター作成

ポスターは A4 判サイズとし、Google スライドにより作成すると決めたものの、デザインや構成をどうするかについては頭を悩ませた。教頭間のアイデア共有では、「中学生に印象づけるためには斬新なものが良いのではないか」「文字を少なくし、写真で視覚的なインパクトを与えるものにしよう」などの意見が出され、同時に、各校のプリンターでポスターを印刷するため、そのコスト面や、ポスター作成に要する技術的な課題を総合的に検討した結果、各校ごとにスペースを割り振り、「PR 文の作成」・「魅力を伝える写真」・「ホームページの URL を QR コードにしたもの」を共通に作成し、掲載するものとした。

その後は、期日を決めてそれぞれの学校に入力をしてもらった。共同編集機能の非常に便利な点は、複数人で共有したシートを、いつでも・どこでも、自身の都合に合わせて編集作業ができることである。進捗状況も随時確認できるため、効率的に制作を進めることができた。各校の入力後、フォントの大きさなどを調整し、完成とした。

4　地域と連携したポスターの活用

完成した PR ポスターは、次のように活用した。

①学校説明会等での掲示　②学校ホームページへの掲載　③北部地区中学校への配布　④熊谷市役所での掲示　⑤熊谷駅構内での掲示

当初はポスターの活用として、７校での掲示や学校ホームページに掲載することを予定していた。制作を進める中で、成果を最大限に活用するためには、中学生に直接見てもらいたい、広く地域の方々に各学校の様子を知ってもらう機会としたいと考え、北部教育事務所及びその所轄する市町教育委員会に協力を依頼し、各中学校へ配布をした。加えて、熊谷市役所及び熊谷駅の御厚意により、それぞれの所内・構内において掲示をしていただいた。これにより、より多くの方々の目に触れる場を創出することができた。

5　成果と今後の展望

この取組のねらいは大きく二つある。一つは「学校を超えた生徒募集の取組を新たに行うこと」であり、これについては大きな成果を上げることができた。限られた時間や状況の中で ICT を効果的に活用し、教頭間で協力をして PR ポスターを作成し、地域機関と連携をして広く周知をした。

作成のツールとして活用した Google Jamboard と Google スライドは、web 上で協調学習などの共同作業をする際にも有効なツールである。今回、教頭が率先して体験したことを、各校の ICT を活用した教育の充実にも生かしていきたい。

もう一つのねらいは「中学生に熊谷市内の県立高校の魅力を伝えること」である。成果の指標としては、学校説明会への参加者数の増加や、高校入試の志願倍率の高まりなどが最も目に見える成果であろうが、一朝一夕に劇的に増加させることは難しい。これまでの「生徒募集」は自校独自で行うことが一般的であったが、今回の取組によって、自校の PR ポイントを再認識するとともに、「全部あり」の熊谷の高校を７校で活性化させよう、地域の力を借りてアピールしようという学校間・地域連携という資源を手に入れることができた。今後もアイデアを出し合い、県立高校の魅力を高め、発信していきたい。

【PR ポスター】

【熊谷市役所での掲示の様子】

「達成感の積み重ねで育む 自己肯定感」

～専門性に基づく構音訓練を通して～

宮代町立百間小学校　難聴・言語障害通級指導教室　教諭　染谷（そめや）　美弥子（みやこ）

1　はじめに

難聴・言語障害通級指導教室というのは、小・中学校の通常の学級に在籍する聴覚や話しことばに障害がある児童生徒が、その障害を改善または克服することを目的として特別な指導を受けるために設置されている教室である。

特に自分の考えや思いを他者に伝えようとする場合、言語面に課題があると内容よりも言語の不明瞭さに意識をもたれてしまいがちである。

ここでは、そのような言語面の課題を早期に改善するため、児童が自分の力で改善していこうとする主体的な姿勢を大切にしながら、分かりやすく楽しく取り組めるようにした実践の内容を紹介する。

2　児童との関わりで把握しておきたいこと

◆児童の全体像
- 生育過程での相談歴
- 理解力
- 学習力
- 集中力、持続力
- 構音の状態
- 器質的な問題の有無

◆児童の背景
- 通級時の同伴及び家庭で課題に取り組むにあたり、保護者，兄弟姉妹，祖父母等との関わり方

◆医療機関や他機関との連携の有無

◆在籍学級担任との連携

3　実践の内容

(1) 訓練初回時

〈構音確認検査〉
- ビデオ撮り：後で確認することができる。

（口唇周りから舌の動きを中心に）
- 正誤音をきちんと整理、理解する。
- 舌操作の様子

始語が遅かったり、おとなしかったりして舌の動きがぎこちない子の場合は、舌運動［べろたいそう］などを取り入れる。

※訓練計画の見通しを立てる。

(2) 訓練時

構音の改善をするための訓練は、

①基礎的な訓練（舌及び舌操作の改善）レベル
②単音節、単語、短文、長文レベル
③般化レベル

の順に進める。

そのために、一つ一つの訓練を児童の実態に合わせて分かりやすくスモールステップで行い、丁寧に評価することが、訓練に対する児童の取り組み方や意欲の持続につながるものである。

また、児童自身が正誤音の聞き分けができること（聴覚弁別能力）、口腔内の舌の状態を意識できることは、児童の自己評価能力を高めることにつながる。

【スモールステップの考え方・工夫】

ア　１時間内の訓練のめあてについてはポイントを一つに絞る。

イ　感覚的に分かりやすい方法で進める。

ウ　児童によって、理解しやすく担当者の真似がしやすくなるような言葉を考慮する必要がある。難聴・言語障害教育に携わる担当者にとって言葉がけに留意することも専門性の一つであると考えている。

〈事例〉☆……めあてに迫るための声がけ
★……担当者の評価
→ 児童の達成感につながる。

〖視覚〗

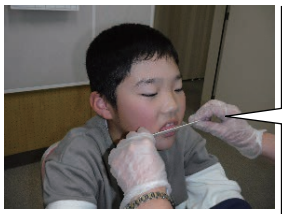
☆「鏡は顔の前に持ってきましょう」
☆「奥歯を軽く合わせてごらんそこからポワンと開けるよ」
★「ちょうどいい大きさだね」
☆「おロの両はしは引っぱらないで」

【児童が自分の口唇周りや舌の状態を確認する】

口唇周りや舌の状態、構音訓練中の舌操作の状態等を手鏡を用いて眼で確認させる。

〖触覚〗

舌の緊張が高く不安定になりやすい場合は、舌圧子やストローを用いて安定を図る。



☆「べろはゆっくり出そう」
★「ゆっくり出せたね」
☆「ここまで出すよ、出したら止めるよ」
★「止められたよ」
☆「べろを後ろに下げないでね」
★「ホットケーキのようなべろになったよ」

【舌を出すポジションに舌圧子を当てておく】

正音かつ明瞭度のある日本語を産生するためには、舌正中（舌の中央）からの呼気が真っ直ぐしっかりと出せることが大切なポイントとなる。そのために手のひらに呼気を当て、正しい呼気の状態を感じ取らせる。

☆「先生と同じかぜを出すよ」
☆「同じかぜが出せたかな、あったかいかぜかな、すずしいかぜかな」
★「すずしいかぜが出せたね」
☆「少し長く出してみよう」
★「すずしいかぜのままで長く出せてるね」

【自分の呼気と担当者の呼気を同時に当てる】

〖聴覚〗

訓練の初期段階では、正しい呼気の音を確認させたり構音の訓練時には誤音や異常構音と正音の違いについて児童自らが聴き分けできたりするようにする。（聴覚弁別力）

エ　訓練教材の工夫

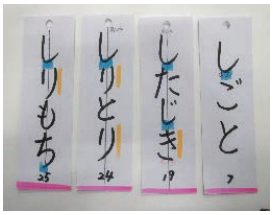
単語レベルの訓練では、教室での訓練時及び家庭での課題練習に使用する教材について、児童・保護者・担当者が使いやすく楽しく取り組めるようなカードを使用している。その際、同席している保護者が家庭練習用のカードを作成することにより内容を共通理解することができると考える

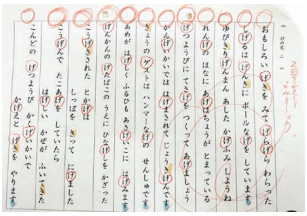
☆「２回続けて言ってね」
★「正しい音で言えているよ」
★「速くしてもすらすら言えたね」

【児童が構音し保護者はその単語を書く】

個人用のカードの良さは、児童の習熟の状態に合わせてめくる速さを調整できることである。日常会話の発話速度に近づけ、正音の安定を図ることができる。

また、なかなか安定が見られない単語がある場合、構音しやすくなるポイントなどを記入すると、児童が正音に対するポイントを意識しやすくなる。





【単語カード・短文】

単語・短文・長文音読の際に、難しい語彙や言い回しが出てきた時は児童と共に確認する。その語彙の意味が理解できると語彙量が増え正しいイントネーションで生活の中でも使えるようになってくる。

4　今後の展望、課題

ことばの教室の担当者には、児童が成長していく上で関わっていく相手との双方向のコミュニケーションを円滑に行うための言語を、早期にしっかりと改善し安定させる責務がある。専門性を駆使した構音訓練を行い、構音が改善され、自分の考えや思いを相手に伝わるように表現しようとする力が育つことは、児童の自己肯定感の向上につながるものでもある。担当者は何気ない会話の中にも褒めるチャンスを見つけ、保護者とも即時に共有していくような配慮が必要である。

構音障害・吃音・難聴に加えて、特別な教育的支援を必要とする児童の通級も増えてきた。今後ますます児童に合わせた楽しくて取り組みやすい訓練が求められていく。そのために、訓練内容をスモールステップで丁寧に進めたり、効果的な言葉がけや評価ができたりするような専門性を高めていくことが重要といえる。これからも児童一人一人の小さな成長を保護者と共に喜び合い、しっかりと見守れるように努めていきたい。

参考：「構音訓練エトセトラ」（講義資料）
牛久保京子
久喜市・宮代町・深谷市アドバイザー

１人１台端末の効果的な活用を目指して

学校環境は児童生徒１人１台端末をはじめ、さまざまな情報機器が整備され、それらを活用した授業の工夫が日々研究されている。こうしたICT教育を推進すべく、本稿では自身のICT活用の考え方と、実践を紹介する。

蕨市立中央東小学校　教諭　譜久村（ふくむら）　淑恵（よしえ）

１　はじめに

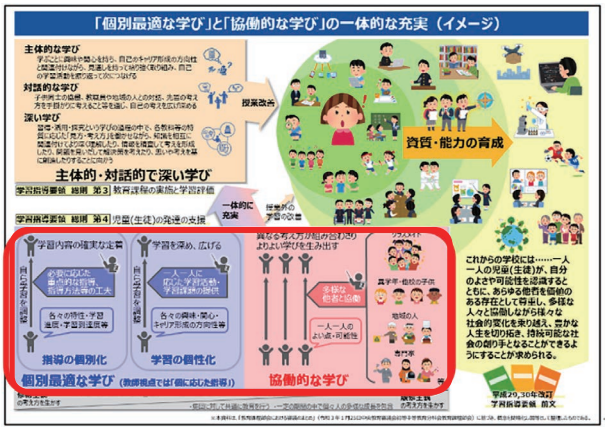
文部科学省がGIGAスクール構想を打ち出してから４年が経った。GIGAスクール元年度の４年前、私は前任校で情報教育主任をしており、各市町村で１人１台端末の整備が進み、端末活用の研究の必要性が高まる真っ只中にいた。自身の置かれた立場や、周りの先生方が新たなことに対して前向きであったこと、さらには県のICTプロジェクトへ参加したことで、ICT活用の推進を考える機会に恵まれた。それらを通して得た自身のICT活用の考えと、授業実践について述べる。

２　ICTを授業に取り入れる視点

ICTを授業に取り入れる視点として、“教師が”ICTを活用する場面と、“児童が”ICTを活用する場面を考え、効果的な方法を採用している。

“教師が”という視点では、ICTを活用することで、いかに教材へ子供たちの興味・関心を引き付けるかということや、子供たちを同じ土台にのせるための工夫を考えている。

“児童が”という視点では、文部科学省の「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」（図１）を念頭に置いて工夫を考えている。１人１台端末を活用するメリットはさまざまあるが、授業展開するに当たって、児童にどのような学びを期待して取り入れるのかを考えることは大切である。



【図１　「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実（イメージ）（文部科学省）】

３　実践内容

私が音楽専科の立場であることから、令和４年度と令和５年度に音楽の授業でICTを活用した授業実践をした内容を紹介する。

(1) 音楽づくりでの実践

校種・学年：小学校・第６学年

題材名：いろいろな和音のひびきを感じ取ろう

ICTを取り入れるメリット

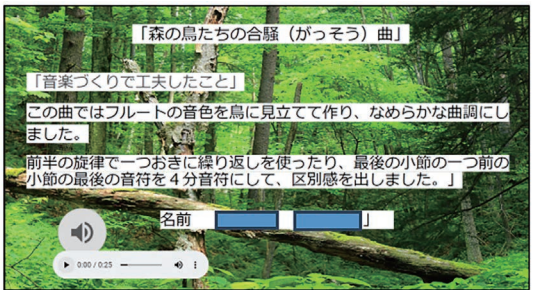
☆ア　一人一人の活動（思考）するペースに合わせて学習を進められる。

☆イ　児童同士で学習の共有化・記録がしやすい。

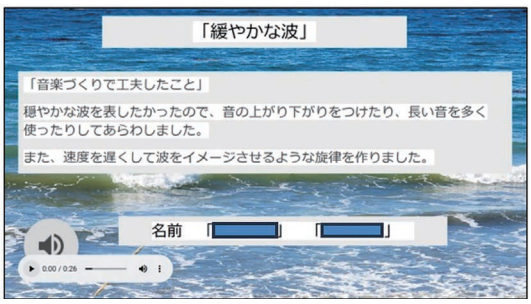
☆ウ　演奏が苦手でも、作った音楽を表現できる。

〈活動の流れ〉

- どのような音楽をつくろうかイメージをもった上で、和音の進行に合った１人４小節の音楽をつくる。…☆ア、ウ
- １人４小節つくった音楽をペアでつなげて８小節の音楽をつくる。…☆イ、ウ
- つくった音楽を、スライド（図２，３）に挿入し、工夫点や音楽のイメージに合った画像とともにプレゼンテーションする。…☆ウ



【図２　児童の作品】

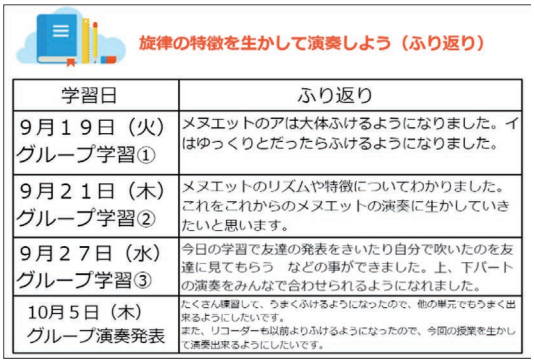


【図３　児童の作品】

どのような音楽にするかということや、旋律の動きや速さ・音色等についてはペアで会話をしながら活動を進める。図２，３のスライドも協働してつくり15 分ほどで完成させることができた。

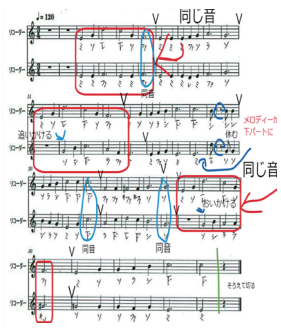
(2) リコーダー演奏練習での実践

校種・学年：小学校・第６学年
題材名：旋律の特徴を生かして演奏しよう
ICT を取り入れるメリット
☆ア　一人一人の活動するペースに合わせて学習を進められる。
☆イ　児童同士で学習の共有化がしやすい。
☆ウ　グループ演奏を記録し、客観的に振り返ることができる。
〈活動の流れ〉
本活動全体を複線型授業として、最終目標に向かって、各々が練習方法を決定しながら活動を進める。毎時間振り返りとして、活動の進捗を記録する。（図４）…☆ア
・演奏曲を決定し、練習を進める。その際、友達と教え合ったり、教師の手本動画を見たり、伴奏音源に合わせたりなどする。…☆ア
・演奏曲の特徴をつかむために、楽譜に気付いたことを記入する。（図５，６）…☆イ
・グループ練習を進める中で、演奏を録音し、曲の特徴が生かされた演奏になっているか確認しながらよりよい演奏を目指す。…☆ウ

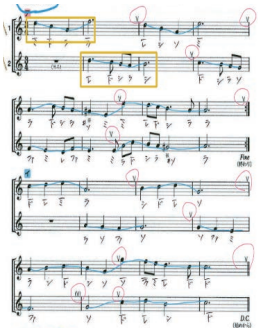

旋律の特徴を生かして演奏しよう（ふり返り）

学習日	ふり返り
９月１９日（火） グループ学習①	メヌエットのアは大体ふけるようになりました。イはゆっくりとだったらふけるようになりました。
９月２１日（木） グループ学習②	メヌエットのリズムや特徴についてわかりました。これをこれからのメヌエットの演奏に生かしていきたいと思います。
９月２７日（水） グループ学習③	今日の学習で友達の発表をきいたり自分で吹いたのを友達に見てもらう　などの事ができました。上、下パートの演奏をみんなで合わせられるようになれました。
10月５日（木） グループ演奏発表	たくさん練習して、うまくふけるようになったので、他の単元でもうまく出来るようにしたいです。 また、リコーダーも以前よりふけるようになったので、今回の授業を生かして演奏出来るようにしたいです。

【図４　児童の振り返り画面】



【図５　児童の楽譜】


【図６　児童の楽譜】

旋律の動きや上下パートの関係に気付き、記入している。デジタルワークシートなので、画面閲覧の機能を使い、互いの考えを共有しやすい。

4　実践の成果

それぞれの授業実践の最後に行った児童の振り返りには、共通して「自分一人ではできなかったことが、友達と一緒にやったことで音楽をつくる（演奏する）ことができた」という言葉が多く見られた。また、それぞれの音楽の内容である音楽づくりや演奏についても、できたと達成感を得られたような言葉も多く記述されていた。音楽づくりの成果物である音楽や、リコーダー演奏発表の様子から、音楽的な思考力や技術が身に付いている児童を多く評価することもできた。これらのことから、今回の実践で１人１台端末の ICT 活用に期待した効果が表れたと考える。端末を使わなくても、同様の音楽指導や、個別最適・協働的な学びをねらった活動をすることはできるだろうが、児童にとって、一つでも多く学習する手段の選択肢が広がることにつながる ICT 活用は、教師が避けては通れない指導方法なのだと感じる。

5　おわりに

今回の実践紹介は、どちらも第６学年の内容であったが、他学年においても、発達段階や児童の実態に合わせて、ICT を取り入れた授業を行っている。第６学年の児童には、１人１台端末を文房具のように扱えることを期待して指導している。“文房具のように”というのは、児童が学習内容によって、鉛筆やノートのように、自分の学習に合った道具を選ぶ一つの選択肢として端末があるようにする、という考えである。そのためには、児童が端末を使うことの良さを実感し、道具の取捨選択ができるようになっていかなくてはならない。それを実現するには、ICT 教育の推進を学校全体さらには市町村全体が組織として取り組み、系統的に情報活用能力の育成をしていく必要がある。私の所属する蕨市では「わらびモデル」として、小学校１年生～中学校３年生の９か年で育成する情報活用能力が発達段階ごとに示されている。こうした指標があることで、各担任・担当が対象児童に身に付けさせるべき情報活用能力を理解し、日々の指導に取り入れていくことができる。結果として、児童にとって情報活用能力の積み重ねがなされていく。

全ての指導を ICT を取り入れたものにしていくのではなく、「効果的な」ICT 活用を図っていくこと、そして、アナログと ICT とのベストミックスの授業を考えながら、授業の更なる工夫・改善に努めていく。

総合的な探究の時間を活用した社会課題の解決
～肢体不自由者にとって快適な働く服を探究しよう～

県立熊谷特別支援学校　教諭　大島（おおしま）　啓輔（けいすけ）

1　はじめに

本校は、小学部、中学部、高等部、訪問教育部が設置されている埼玉県北部にある県立肢体不自由特別支援学校である。児童生徒の多様な障害に対応するため、以下の四つの教育課程を編成している。一つ目は、小中・高等学校に準ずる教育課程（類型Ⅰ）である。二つ目は、小・中・高等学校の目標・内容の一部又は全部を前学年または前学部に替えて学習する教育課程（類型Ⅱ）である。三つ目は、各教科の目標・内容を知的特別支援学校の各教科の目標・内容を参考に学習する教育課程（類型Ⅲ）である。四つ目は、各教科等の内容の一部または全部に替えて、自立活動の目標、指導の手立てを主として学習する教育課程（類型Ⅳ）である。

本実践は、筆者が株式会社レオウィズ（以下、レオウィズ）の汐中義樹氏（当時本校教諭）と株式会社カインズ・ビジネスサービス（以下、CBS）の國頭圭吾氏に声をかけてもらいスタートした。本校は、以前から卒業後の実際の職場を見学することを目的としてCBSを利用してきた。見学中に生徒が口にした、「私たちのように身体に障害のある人でもおしゃれに着ることができる服が欲しい。」という願いを叶えるために、CBSと連携し実践がスタートした。

2　1年目の実践と成果について

１年目の実践は、高等部の類型Ⅰ・Ⅱに在籍する男子生徒７名を対象に行った。実践の結果として、肢体不自由のある人でも着やすくなるように設計された『ユニバーサルスーツ（写真１）』を作成することができた。このスーツは、在籍していた地域の中学校の制服や入学式・卒業式で着たスーツが着づらかった経験から発想された。さらに、足に障害があるためズボンを履くのに困っている人に喜んでもらいたいという思いから制作された。１年目の取組を通じて、生徒に以下の３点の成果が表れた。１点目は、生徒が自分自身の経験やアイデアが社会を変えるきっかけになることに気付けたことである。２点目は、協働することで他者との違いに気付けたことである。３点目は、社会の課題に気付くきっかけとなり、自分の意見を発信することの大切さを学べたことである。一方で生徒から、「ただ作っていくのではなく、使いやすさやデザインなどを考慮する必要性があるのは決して簡単ではないことがわかった。」と、使う人の視点で使いやすさを考えながら製品をデザインするといった新たな課題が挙げられた。

【写真１　完成したユニバーサルスーツ】

１年目の成果を基に、２年目のテーマを『肢体不自由のある方を対象にした働く服づくり』と設定した。このテーマの設定には、以下の二つの目的がある。一つ目は、生徒自身の経験やアイデアが他の人の役に立つことに気付き、生徒の自己肯定感や自己有用感を高めることである。二つ目は、協働して探究する活動を通して、協働する重要性や楽しさ、協働して活動する意義などを理解し、目的に向かって協働する能力を育むことである。１年目の実践に引き続き、レオウィズの汐中義樹氏とCBSの矢野尚志氏と協力し、連携授業を進めていくこととした。

3　2年目の実践と成果について

２年目の実践は、中・高等部の類型Ⅱに在籍する、中学部の女子生徒４名と高等部の男子生徒６名、計10名を対象とした。対象生徒たちは、学習に対する意欲が高いものの、自分の気持ちを伝えることなどのコミュニケーション能力や体験的な活動を通じて、興味関心を広げることが共通の課題である。コミュニケーションに対する課題の要因として、以下の２点が考えられる。１点目は、類型Ⅱに在籍する生徒が少ないことである。２点目は、一人一人の学習状況に合わせて、中学部では学年別、高等部では習熟度別に１、２名程度の少人数の学習グループ編成をしているため、話合い活動の経験が積めていないことである。また、興味関心が狭い要因として以下の２点が考えられる。１点目は、移動の困難さによる経験不足である。２点目は、自己肯定感が低いことである。これらの要因が重なり、新しいことへの挑戦意欲を減退させ、興味関心を狭めてしまっている可能性が考えられる。一方で、適切な支援を受けることで自分の考えを言語化することや適切なフィードバックを受けることで主体

的に取り組むことができる。

２年目の取組では生徒の実態を考慮して、３～４人の小グループを編成し学習を進めていくこととした。また、単元における目的を生徒と共に確認しながら進めていくため、本実践の学習内容を四つの小単元に分けた。本稿では、既に実施済の二つの小単元の目的や主な成果について紹介していく。

①情報収集

この小単元の目的は以下の２点である。１点目は、本単元に対する意欲を高めることである。２点目は、職業による服装の違いに気付くことである。はじめに、生徒の保護者が職場で着用する服の調査を行い、それぞれの調査結果を発表し合う学習を行った。次に、障害者雇用を行っている株式会社 LIXIL Advanced Showroom 八重樫祐子氏、株式会社タウ　小山あゆみ氏、井上光政氏、松本諒氏、社会福祉法人美里会の黒澤計太氏の２社１施設の協力を得て、肢体不自由のある方の働く服についてのインタビュー調査を実施した（写真２）。この単元を通じて、様々な職種の働く服の違いや共通点について気付けた。しかし、生徒からはデザインなどの活動に不安が生じている様子がうかがえた。

【写真２　インタビュー調査の様子】

②情報をまとめる

この単元は、情報を整理し、課題を発見することを目的とした。各グループ Google Jamboard を活用して、以下の課題を発見した。なお、グループ名は対象生徒が考えたものをそのまま使用している。

グループ名	課題
KKK	両肩が動かしにくい方の働く服
RYTA	高級な物を扱うのにふさわしく手に麻痺のある方の働く服
THY	手の不自由な方で、汚れても目立たなく、シワなりにくい働く服

さらに、デザインするということへの不安を軽減するため、芝浦工業大学　蘆澤雄亮准教授に『車椅子に乗っていてもかっこいい服』をテーマに講義をいただいた。この講義を通じて、生徒から「デザインは難しいものだと思っていたが、身体の不自由な僕たちにしかできないデザインもあるということに気づけた。」などのプラスの感想が多く挙げられ、今後の活動に対する不安を軽減でき、意欲を高めることができた。

4　今後について

本実践は、現在も進行中であり、残り二つの学習内容を予定している。一つ目は、発見した課題の解決に向けたアイデアを考えることを目的とした探究活動である。この活動では、CBS が生徒の考えたアイデアを基に試作品を作り、生徒は試作品を基に新たな課題を見つけ、課題解決のためのアイデアを出し合う探究を繰り返す予定である。二つ目は、これまでの成果をまとめ発表することを目的とした、グループ発表の活動である。この活動では、各グループが設定した課題や解決に向けた探究によりでき上がった試作品について協力関係者の前で発表していく。

5　今後の展望

実践を通じた成果として、生徒同士のコミュニケーションの機会が増えてきた。さらに、自信を持って意見を発言する姿が見られるようになってきた。一方で、個々の生徒の実態に応じた支援について、教員間での共通理解を図っていくことが課題となっている。

今後私は、生徒が自分の願いを叶えるために課題解決を図る探究プロセスを通して、社会の課題を解決する意欲を向上できるような実践へと深化させていきたい。また、生徒が他者の意見を収集し協働して活動することを通して、新たな価値が生まれる等の協働活動のよさに気付いていけるよう、授業の工夫を続けていきたい。

教師生活を振り返って
～これまでの経験から、次に繋げたいこと～

杉戸町立西幼稚園　教諭　岡安（おかやす）　悟（さとし）

1　はじめに

「小学校の先生になりたい」そんな夢を描きながら少年時代を過ごしていた私に転機が訪れたのは高校時代。部活のロードワークで走っていると、無邪気な幼稚園児たちが「がんばって！」と応援してくれた。そんな純粋な姿に力が湧き、「このような子供たちと関わる仕事に就いてみよう」とシフトチェンジしたことを昨日のように覚えている。大学時代は親元を離れ、福岡で独り暮らしをしながら、学業と部活に明け暮れていた。小学生から大学まで続けた野球では、挨拶などの礼儀や最後までやり通す気持ちの強さを学んだように感じる。就職するために地元に戻り、公立幼稚園は数が少なく狭き門であったが、念願の幼稚園教諭になることができ、期待と不安が入り混じりながら社会人生活をスタートさせた。

2　1年目を振り返って

教材研究、教材準備、事務仕事、個人記録とたくさんの業務に追われながら毎日を駆け抜けていた１年目。「保育がうまくいった」と思えたことは数えるほどしかなく、理想と現実のギャップに悩みながらも、先輩教員方にサポートをいただきながら１年目を終えることができた。全てが初めてで、分からないことだらけであった。まずは目の前のことに一生懸命取り組むこと、子供たちの思いに寄り添うことだけは忘れないように保育を進めていった。卒園児を送り出し、保護者から「先生が担任でよかったです。ありがとうございました。」と涙ながらに御挨拶をいただいた瞬間に１年間の苦労が報われたように感じた。

経験を重ねていくことで、子供たちの興味関心に寄り添いながら、教師の願いを遊びに組み込んでいくことの大切さを知り、保育の奥深さや楽しさを感じることができてきた。年次研修では、様々な自治体の先生方と交流し、それぞれの自治体の課題を知ったり、同年代の先生方に刺激を受けたりして、収穫したものを園に持ち帰り、保育に生かしていった。また、園内研修では、自分自身の保育を見つめ直すきっかけとなると同時に、経験が異なる先生方からの様々な視点で保育を捉え意見を交わし合い、保育の質を高め合うことができている。

3　子供たちから学ぶこと

幼稚園教諭にとって、子供たちの遊びを予測し環境を整え保育を行うことは最も重要なことである。しかし、時に子供たちは教師の予想を上回る想像力を発揮し、遊びを展開する。私たち大人は固定観念に捉われすぎてしまう場面も多く、子供たちの想像力、そして創造力に驚かされる。子供たちは無限の可能性を秘めていること、教師はそれに対応できる柔軟性が必要だと子供たちと接する機会が増える度に感じさせられた。教師として、自分たちが子供たちに教えるだけでなく、教えられることも多くあり、それが私自身成長する糧となっているのだと感じるようになった。

【先生　はいどうぞ！】

4　おわりに

私自身、１、２年目の頃を振り返ると、不安であったり、失敗したりすることを繰り返しながらも、教師としてやり遂げられたのは、園長先生をはじめとする先輩教員の存在が大きかった。

現在は後輩が入ってくるようになり、段々と立場が変わってきている。若い先生方にはたくさん挑戦し、失敗を繰り返しながら、自分らしい保育を見つけてほしい。自分の強みをもつことは、自信に繋がる。そしてそれを見つけるまで温かく見守ったり、導いてあげられたりするようなチームを築いていきたい。

また、今後も幼児教育の重要性は高まってくる。現在課題の一つとなっている「地域に開かれた教育課程」の実現を目指すため、様々なニーズに対応できる幼児教育や施設の多様性が求められてくる時代に来ている。そのためには現場の教師のアイディアが大切と考える。アイディアを出し合いそれを認め合う職場環境づくりを目指していきたい。それらを通し、公立幼稚園の存在意義を地域や家庭、異校種の先生方と共通認識させていくことが責務と考え、その役割を担っていく存在となっていきたい。

子供たちの笑顔輝くプロジェクト型学習と英語運用能力を伸ばす授業の実践を目指して

草加市立花栗中学校　教諭　大瀧（おおたき）　優作（ゆうさく）

1　はじめに

外国語の教員として教壇に立ってから７年。そんな中ふと、自分自身の授業を振り返った。はたして子供たちは授業を楽しめていたのだろうか。子供たちの英語運用能力は伸びているのだろうか。今までの資料を振り返ると、両者とも「そこそこ」であった。同じ内容を各学級で教え、何を目的に英語を教えるのかを悩んだ。また、教えるべき事柄に加えて指導方法に工夫をしないと生徒の英語運用能力を伸ばすことができない。この混沌とした状態から授業改善がスタートした。

2　素晴らしい先輩方との出会い

何をどのように改善していけば良いのかわからない状況の中、一昨年度から草加市教育委員会に勤務されている外国語科担当指導主事の髙橋道人先生からアドバイスをいただく場面が多くあった。先生の実践や考え方は、目から鱗（うろこ）が落ちるようであった。特に「プロジェクト型学習」は今の私の授業を支えるものである。あるプロジェクト（学習課題）に向けてチームで活動していくスタイルである。協働的な学習として非常に参考になった。

また、５年次の教科研修からお世話になっている、熊谷市にお勧めの外国語科の落合千裕先生からは、英語による教師と生徒のやりとりの大切さを学んだ。それに加えて第二言語習得の観点から有効な指導法を取り入れて、生徒の英語運用能力を育成する方法も知ることができた。

お二人に共通しているのは、常に「生徒のために」必要な力を育成できる授業を提供したいという思いと、さらに良くしたい、至らない部分は改善していきたいという「学び続ける姿勢」である。専門的な知識に加えて、この２点は教師として大切なものであるということを再認識することができた。

3　授業での実践

３年間持ち上がりの３年生、受験生であったがプロジェクト型学習を取り入れてみて、何よりも大きく変わったのは生徒たちの表情である。プロジェクトは常に『〇〇さんが Happy になるように～をしよう！』という目的・場面・状況があり、生徒たちは他者貢献をするために授業に取り組んでいた。特に思い入れが深いものは、３年生の教科書（開隆堂）の内容でアメリカ手話（American Sign Language）に関するものがあった。実際にアメリカ手話を使用する方たちに向けて何かできないかと考えた際、日本アメリカ手話協会に連絡を取り、アメリカ手話をコミュニケーションの手段として使用する方と繋がることができた。その方からビデオレターで生徒たちへのリクエストをいただくことができた。ビデオはマイケルさんの音声なしのアメリカ手話のみ。アメリカ手話とアルファベットが対になっているワークシートを用意したが、理解するには時間がかかる。生徒たちは何度もグループでビデオを再生し、マイケルさんの伝えたいことを理解しようとしていた。プロジェクトゴールは『マイケルさんが Happy になるように埼玉県や草加市について紹介しよう！』とした。生徒たちは、どうすればマイケルさんに伝わるか、どうすれば楽しんでもらえるかを常に考えながら日々のプロジェクトに取り組んでいた。伝える方法として、動画を作るグループ、紙芝居を作るグループ、スライドを作るグループなど様々であった。草加煎餅を紹介するグループは、週末に地元の煎餅屋さんに行き煎餅焼きを体験した。東武動物公園の魅力をアメリカ手話で全て伝えたいというグループはスライドを作成した上でアメリカ手話の説明を加えて動画にしていた。このプロジェクトを経て私が感じたことは、生徒一人一人が持っている力の可能性。そして、目的・場面・状況の設定によって生徒たちのモチベーションは大きく変わるということである。

4　終わりに

上記のような実践をしてきたが、それが 100％正しいとは思わない。日々の教育活動に全力で取り組んではいるが、今も自分の中で疑問が解決しては、また新たな疑問が生まれるという繰り返しである。プロジェクトの実施と英語運用能力の育成をバランスよく行うために、日々悩みながら教材研究をしている。今の自分に満足して自己研鑽を怠るということは、目の前の生徒たちを蔑（ないがし）ろにしているということと同義なのではないかと考える。私はこの７年間を通して教職に魅せられてきた。目の前の生徒たちに日々全力で向き合い、成長に寄り添うことができるこの仕事を誇りに思っている。この仕事を続ける限り、私は「学び続ける教師」でありたい。

出会いを大切に学び続ける

ふじみ野市立大井小学校　校長　抜井（ぬくい）　由美子（ゆみこ）

はじめに

私を成長させたのは、人との出会いである。学校は、人と人とが関わり合いながら成長する場所であり、「つなぐ」役目を果たしていくことが大事であると考える。「つなぐ」役目とは、「子供を笑顔につなぐ、子供のなりたい未来の自分につなぐ、保護者を安心につなぐ、教職員を自信につなぐ、地域と学校をつなぐ」ことである。思い描くような学校づくりには程遠いが、日々感じていることをお伝えしたいと思う。

1　感性を磨く

教諭の頃は、同僚の先生方と教材研究を深めた。担任として、学級経営や授業、生徒指導、教育相談等の方策を取得し、自分自身の教育の引き出しの中身を充実させようと研究を重ねた毎日であった。先輩から学び、同僚と共に学んだ日々が自分を成長させたと思っている。その頃に得たことを多くの先生方に伝えていくこと、これが管理職を目指した理由である。

教頭の時は、職員室の担任として二つのことを心掛けた。一つは、いつも元気よく、笑顔でいる姿を見せること。もう一つは、先生方が気持ちよく働けるように環境を整えることである。そのためには、子供たちや先生方へのこまめな言葉掛けと先を見通した準備を行った。目と耳を使い、心のアンテナを高くして、先生方が求めていることに応えられるようにした。また、先生方が相談しやすい雰囲気もつくり、一緒に課題解決を図った。

この頃は子供や教職員たち一人一人をきめ細かく見て感じ取る力、感性を磨くことを意識していたと思う。

2　出会いを育てる

これまでに出会った多くの方々や物事には大変感謝をしている。出会っただけでも素晴らしいことではあるが、自分自身を成長させるためには、その出会いを更によりよいものにしていくことが大事であると感じている。

子供たちとの出会いは、いつも学び続けるためのエネルギーを与えてくれる。私たちの行っていることの結果が子供たちの姿であると考えると、教師は学び続けなければならないと実感する。

先生方との出会いは、これまでの自分自身を振り返らせてもらえる。「もっとこうすればよかった」と思うことも少なくない。私は、先生方の授業力とやる気を高めるための力となりたい。日々子供に真正面から向かい合い、頑張っている先生方のことをよく見て認め、具体的な言葉を掛ける。その言葉が先生方の自信につながると信じているからである。また、先生方を信頼して任せることも必要であると思う。

保護者や地域の方々との出会いは、多様な考えに触れ、多面的に学ぶことができる。

多くの出会いを生かし、その関わりの中で子供も大人も成長する、これが学校の魅力の一つであると考える。

3　時代を捉える

校長は、時代の流行を捉える、時代の課題を捉える、時代を反映した教育活動を行うことが必要である。教育の最先端は「学校」であるという意識をもつことで「やる気」や「本気」にもなれる。また、「何のために」「誰のために」という本質を見極めることも大事である。人の言葉に耳を傾け、自分の目で確かめる。そして、経験に結びつけて子供や先生に寄り添った決断をすることが重要であると考える。それが正しいのか、それでよいのかと不安になることもある。しかし、自分自身を信じることも大切であると思う。

年度当初、先生方に三つのことを話している。一つ目は学び続ける教員であること。二つ目は常に自分を振り返る教員であること。三つ目はいつも笑顔を忘れない、子供を元気づける教員であること。これは、校長の自分自身にも向けた言葉であることはもちろんである。

おわりに

幸せを感じるときは、たくさんある。例えば、子供たちから笑顔を向けてもらったとき、子供が頑張ったことを伝えに来たとき、教職員の笑い声が職員室から校長室まで聞こえてきたとき。そう、私の元気の源は、子供たちと教職員の笑顔である。その原点は、子供たちと教職員たちが大好きなことである。

世界に冠たる埼玉教育を目指して
～第４期教育振興基本計画に期待を寄せて～

【略歴】
2015 年から現職。第 12 期中央教育審議会委員、内閣府 総合科学技術・イノベーション会議（CSTI）評価専門調査会「教育・人材育成 WG」委員、文部科学省「質の高い教師の確保のための教職の魅力向上に向けた環境の在り方等に関する調査研究会」委員など、多くの審議会・有識者会議などで委員を歴任。

戸田市教育委員会　教育長　戸ヶ崎（とがさき）　勤（つとむ）

1　はじめに

私は、教育長に就任して以来、①AI では代替できない能力と、AI を活用できる能力の育成　②産官学と連携した知のリソースの活用　③「経験と勘と気合い（3K）」から「客観的な根拠」への船出（EIPP[※1] の推進）④授業や生徒指導などを科学すること　これらを教育改革のコンセプトとして掲げ、これまで教育改革に取り組んできた。

現在、中央教育審議会をはじめ、国の様々な会議に委員として参加させていただいている。その際、常に、現場感覚を忘れず意見を述べているが、その原点は埼玉教育にある。今まさに、私も関わってきた第４期埼玉県教育振興基本計画の策定が進められている。その会議の中で、「令和の日本型学校教育」を着実なものにしていくには、埼玉教育も「教育 DX」や「DE&I」[※2] の推進が必須であることを繰り返し述べてきた。ここでは、本市も含めて多くの自治体においても喫緊の課題となるであろう内容について以下に述べる。

2　教育データ利活用の推進に向けて

医師の診察や警察の捜査が、血液検査や DNA 鑑定といった科学的見地に基づいて行われる一方、教育現場では、経験と勘と気合（3K）が蔓延（はびこ）っていることに強く疑問を抱いていた。本市では「埼玉県学力・学習状況調査（以下、埼玉県学調という）」において、児童生徒の学力を特に伸ばしている教師の授業分析やヒアリングを基に「指導用ルーブリック」を作成し、全校の授業改善に活用している。さらに、リーディングスキル[※3] にも着目し、全国及び埼玉県学調とリーディングスキルテストとの相関分析により、単なる読解力にとどまらず論理的思考力の育成に向けた授業改善の一助としている。また、こども家庭庁の実証事業である「教育総合データベース」を活用したダッシュボードを構築し、不登校の SOS の早期発見・支援などのために活用を進めている。そのデータベース内には、埼玉県学調の児童生徒質問紙の結果が生かされている。

このように、本市で進めるデータ利活用において、先進的に IRT を用いた埼玉県学調は常に基盤となっており、他県でもこの方式による学力調査が導入され始めている。来年度予定されている埼玉県学調の全面 CBT 化に向けては、市町村教委を全面的にバックアップし、確実に実施して欲しいと強く願っている。

3　誰一人取り残されない学びの推進に向けて

本市では不登校児童生徒への支援について、多様な学びの機会や支援を行っていくために「戸田型オルタナティブ・プラン」を推進している。これまでも、中学校には「さわやか相談室」、市内に教育支援センター「すてっぷ」を設置してきたが、この度、全小学校に戸田型校内サポートルームの「ぱれっとルーム」、2ヶ所目となる民間運営の「西すてっぷ」を設置した。また、オンライン上のシェア型教育支援センター「room-K」を活用し、社会的自立を見据えた支援を行っている。さらに、昨年度に埼玉県教育委員会との連携事業により不登校生徒支援教室「いっぽ」を市内にある県立高校内に設置し、市内中学校の教師も関わり学習支援を行うほか、必要に応じて専任の SC と相談ができるように体制を整えている。不安を抱えた生徒が高校生活に夢と希望をもって進学するという成果も表れている。このような県立学校部と市町村支援部との垣根を越えた円滑な連携・協力は先進事例として県内はもとより全国に波及することを期待したい。埼玉県教育委員会においては、これまでの「参考事例」や単なる「紹介」に留まることなく、優れた実践は、速やかに県内外に波及できるような仕組みづくりや、学校間や自治体間ネットワーク（コンソーシアム）等の構築にも注力いただき、誰一人取り残されることのない埼玉教育が一層推進されることを願っている。

4　教育村・学校村にある壁に風穴を（学校は内側からしか変えられない）

多くの企業連携を進めていると、学校をはじめ教育界は、教育村、学校村と揶揄（やゆ）され、変化を嫌い現状を維持する風土があると言われることがある。私は「学校は内側からしか変えられない」と考えている。そこで、「隗（かい）より始めよ」の精神で、まず教育委員会が積極的に外部の企業や人材と連携しつつ、最先端の知のリソース等を取り入れてきた。また、「児童生徒の出ていく社会を知ろうとしないのは極めて不誠実」と強い信念で学校管理職に語り続け、「凡庸な 90 点の取組よりも、60 点でも夢のある挑戦を」などといった学校の「自走」を支援する姿勢を根気よく伝え続けた。その結果、本市の小・中学校では夢や誇りをもった取組が進んでいる。また、昨年度から「教育プロフィットセンター」の実現に向け、ふるさと納税を活用したクラウドファンディング『戸田市未来の学び応援プロジェクト』にも取り組んでいる。今後も、「当たり前」を問い直し、学校の自走を全面的に支援する「啐啄（そったく）同時の教育委員会」を目指し、学校と共に夢のある挑戦を加速化していきたい。埼玉教育においても各教育委員会の自走を強力に支援していただきたい。

5　おわりに

埼玉教育には、埼玉県学調や、協調学習など全国に誇れる教育実践が多くある。今年度から、県立高校学際的な学び推進事業「学・SAITAMA プロジェクト」もスタートした。埼玉教育の「強み」を一層伸ばす計画を進め、埼玉教育の歩みや途中経過も含めて「EDU-Port ニッポン（日本型教育の海外展開）」などで世界へ広く発信し、政策波及することも期待してやまない。

※1　EIPP（Evidence Informed Policy and Practice）
※2　DE&I（Diversity・Equity and Inclusion）
※3　汎用的な基礎的読解力　（参考）国立情報学研究所 / 教育のための科学研究所

さらなる選ばれるまちを目指して

川口市市長室広報課　シティプロモーション担当　主任　齊藤（さいとう）　貴聖（たかまさ）

川口市は埼玉県の南の玄関口として、荒川を隔てて東京都に隣接し、人口は60万人を超え、政令指定都市を除き全国で２番目の規模を誇る自治体です。

昭和８年に１町３村が合併して誕生し、平成23年には鳩ヶ谷市との合併を、平成30年には中核市への移行などを経て、令和５年に市制施行90周年という記念すべき年を迎えました。

【新荒川大橋から望む川口市】

都心へのアクセスに優れた好立地

古くから鋳物や植木などの産業が市の成長を支えてきましたが、その発展には豊かな土壌と、都内に隣接する立地の良さが大きく起因しています。新宿まで約25分、池袋まで約20分、東京や品川、遠くは横浜までも乗り換えなしでアクセスできるという交通利便性に加え、都内に比べて地価や物件価格が比較的安価であることなどの住みやすさが評価され、大手住宅ローン会社が実施した「本当に住みやすい街大賞」では２年連続の１位を含む４年連続で入賞するなど、高い評価をいただいています。

本市が令和５年度に実施した市民意識調査では、川口市を選んだ理由の中で、「都心に近い」と「交通の便がよい」が共に30％を超え、市民からも立地の良さを評価する声が多くあがっています。

豊かな自然と触れ合うことができる

都心部へのアクセスの良さに加え、駅周辺には商業施設や高層ビルが多く、都会的なイメージを持つかたも多いと思いますが、現在でも多くの自然が残っていることも本市の魅力の一つです。前述の市民意識調査では都心へのアクセスの良さの他にも、「自然環境が豊か」であることを本市の魅力に上げる方も少なくありません。本市にはグリーンセンターやイイナパーク川口といった緑豊かな施設が各所にあり、休日には家族連れやカップルなどが楽しそうに遊ぶ様子も多く見受けられます。

また、春は桜、秋は紅葉と季節の移ろいを感じられる名所も点在し、旬の時期には多くの人で賑わいます。

【令和４年に全面オープンしたイイナパーク川口】

「さらなる選ばれるまち」を目指して

本市では、川口駅周辺の整備の指針として「川口駅周辺まちづくりビジョン」を策定し、地域が持つポテンシャルを最大限効果的に発揮できるよう、駅や商店街、文化・公共施設、広場・公園など拠点施設間の歩行者の移動を円滑にし、魅力的な空間を創出することで、快適に歩きながら楽しめるまちを目指し事業を進めています。また、住民票の写しの発行や住民異動の手続きなどが土・日曜、祝日も利用できる、本市２か所目の行政センターとして、東川口駅前行政センターが令和６年５月に開所予定であるほか、令和８年度には（仮称）川口北警察署の新設も予定されています。近隣にお住まいの方はもちろん、全市民がよりきめ細かな行政サービスを受けることができる環境を整えることにより、これからも「住みやすいまち」を超えて、いつまでも住み続けたい、「さらなる選ばれるまち」であり続けることができるよう様々な取組を進めてまいります。

伯元・察元・烈元
～江戸時代に囲碁の本因坊を３人も生んだ幸手～

幸手市郷土資料館　館長（学芸員）原（はら）　太平（たいへい）

本因坊とは

幸手市は、囲碁の本因坊との関係がとても深い。「本因坊」は、寂光寺（京都府京都市左京区）の塔頭（大きい寺院の中にある小さな寺）の一つで、その僧侶であった算砂が信長・秀吉・家康に碁を教えたといい、碁界の頂点にある江戸幕府の碁所についたところから、囲碁の家元の家名となった。

江戸時代には、本因坊家・安井家・井上家・林家という４家の囲碁の家元があり、本因坊家はその筆頭で代々名棋士を輩出した。代々世襲制をとったが、21 世秀哉が引退した昭和 14 年（1938）以降は、その名跡は日本棋院に譲渡され家元制は終わり、本因坊戦の勝者に与える称号となった。

幸手が生んだ３人の本因坊の墓石

市域には、江戸時代の囲碁の本因坊家第８世伯元、第９世察元、第 10 世烈元の墓石があり、いずれも出身地は現在の幸手市域である。囲碁文化史上、本因坊家の家督を３代にわたり同一自治体の出身者が継承した事例は他になく、非常に名誉なことである。

本因坊家代々の墓は、寂光寺と本妙寺（東京都豊島区巣鴨）にあり、市域の墓石は供養のために建てられたとみられるが、当市と本因坊家との関わりを示す重要な歴史資料として貴重であり、平成 26 年（2014）５月に市指定文化財に指定された。

本因坊第８世伯元

伯元は、幸手市天神島の出身で、小﨑（尾﨑）元右衛門の子として享保 11 年（1726）に生まれた。15 歳のとき、本因坊第７世秀伯の弟子となり、間もなく寛保元年（1741）に跡を継いで本因坊第８世となる。しかし、宝暦４年（1754）に病気のため、弟子の察元に跡目を譲るとすぐに亡くなっている。

碁格は６段。墓石は天神島の共同墓地内にある。戒名は、「妙法本因坊伯元日淨」と墓石に刻まれている。

本因坊第９世察元は「棋道中興の祖」

察元は、幸手市平須賀の出身で、間宮又左衛門の子として享保 18 年(1733)に生まれた。幼少のころから囲碁に長け、本因坊第８世伯元の弟子となり、宝暦４年（1754）に本因坊第９世を継いだ。

明和３年（1766）に井上因碩（井上家第６世）との争碁に勝利、名人（９段）に昇進し、その後明和７年（1770）に江戸幕府の碁所に任じられ、「棋道中興の祖」と称された。没年は、天明８年（1788）。

平須賀の共同墓地にある墓石は、察元の兄の間宮又左衛門が天明８年（1788）７月に建立したもの。正面に「本因坊上人之墓」とありさらに、右・裏・左の各面には、察元の事績と人となりを示す川碕整儀が撰文（せんぶん）した文章が刻まれている。

本因坊第 10 世烈元

烈元は、幸手市上吉羽の澤村家の出身で、寛延３年（1750）に生まれ、文化５年（1808）に亡くなり、碁格は準名人８段であった。幼少のころから本因坊第９世察元に弟子入りし、察元が碁所に就いた明和７年（1770）、21 歳６段のときに察元の跡目になった。天明８年（1788）察元の死去に伴い家督を継ぎ、本因坊第 10 世となる。

烈元の出自は、従来、幕府御数寄屋方組頭の「山本氏之男」とされていた。しかし、上吉羽の澤村家の個人墓地で「本人坊」と刻まれた墓石の発見をきっかけに「澤村烈元」「幸手産烈元」と記された棋譜や「本因坊烈元日居士（本来の諡（おくりな）は「日実」）」と記された澤村家分家の過去帳、さらに実父を「沢村兵右衛門」とする資料が確認されたことなどから、烈元の出身地は幸手であることがほぼ確定した。

幻の第 12 世本因坊－奥貫智策－

『新編増補　坐隠談叢　囲碁全史』は、武蔵国幸手出身の奥貫智策について、「本因坊第 11 世元丈の門下で、幼少より弟子となったが、とても敏捷（びんしょう）の少年で、元丈も将来を嘱望し、跡目としたが、文化９年（1812）９月 27 日、27 歳にして亡くなった」と記述している。

もし、智策が生きていれば本因坊第 12 世となり、幸手出身の本因坊は４人となったのだが、致し方ない。

今はただ、「囲碁のまち幸手」の子供たちから、４人目の本因坊が出てくれることを祈るばかりである。

【市域の幸手本因坊三代の墓石（左から伯元・察元・烈元）
いずれも市指定文化財（歴史資料）】

子供から大人まで科学を学べる！　楽しめる！！
科学技術体験センター（ミラクル）

越谷市教育委員会生涯学習課　主幹　武田（たけだ）　純一（じゅんいち）

1　科学技術体験センターについて

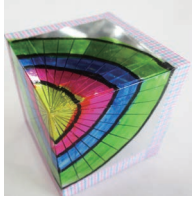
越谷市科学技術体験センター（愛称：ミラクル）は、平成13年（2001年）に開設された体験型科学館です。「科学事始め～わくわく体験・夢・感動」をテーマに未来を担う創造性豊かな人材の育成を図るため設置されました。

当センターは、埼玉県に三つある科学館の一つで、科学にまつわる実験や工作、ショーの見学、様々な装置による体験ができます。主要事業として、当センター職員が学校を訪問して行う学校教育関係事業と、青少年をはじめ、多くの市民が理科や科学に触れる機会として、生涯学習関係事業の二つを柱として運営しています。

入館料は無料で、最寄りの駅（東武スカイツリーライン新越谷駅もしくはJR武蔵野線南越谷駅）から徒歩10分の位置にあり、45台分の無料駐車場（9時～17時）があります。

2　毎日できる実験体験・工作体験

実験体験では、使い捨てカイロ（化学カイロ）の仕組みや、静電気、炎色反応など日常にある現象について、実験を通して学ぶことができます。また、科学工作では、３Ｄ万華鏡（画像）やグライダー、ガラス管を加工して作る液晶のストラップなどを作製して、化学変化で起きる事象を体感することができます。メニューは、月毎に変わり、小学生から体験可能で、低学年（１年生～３年生）と高学年（４年生～大人）で内容が異なり、どちらも30分～40分程度となっています。



【３Ｄ万華鏡】

【覗くと見える模様】

3　見て、触れて、五感で楽しむ科学体験装置

当センターの２階は、科学技術を用いた体験装置があります。月の重力を疑似体験できるムーンウォーカーや位置エネルギーを利用した大型竹とんぼなど、小さな子供から大人まで科学を体験できます。また、新たに導入したインタラクティブ体験装置（画像）は、手を触れず、動くだけで映像が変化し、とても人気があります。３階では、簡単な紙工作ができるワークショップやロボットの公開があります。

【触れずに映像が動く
インタラクティブ体験装置】

4　科学の力が見られるサイエンスショー

毎週土日及び祝日は、１日に２回、サイエンスショーを開催しています。最大200名が入るホールで、液体窒素を使っていろいろな物を凍らせる実験や、水素と酸素を混ぜて爆発させる実験、色がパッと変わるびっくり水、空気の力を利用した巨大空気砲など、目で見て楽しめる実験の数々を見ることができます。また、年に数回、特別講師を招いたサイエンスショーを開催して、来館された方々に科学に親しんでもらっています。

【サイエンスショーの様子】

5　最後に

このほかにも、企業や大学などと連携した講座や、当センター職員による特別な科学講座などを実施しています。また、年に数回一つのテーマを掘り下げて学べる企画展示を行っています。令和５年12月からは、２月に国際隕石学会に登録された『越谷隕石』について実施し、子供から大人まで学べる機会を提供しています。

【企画展示「越谷隕石と日本の隕石」】

日進月歩の科学ではありますが、分かりやすく身近なものであるということを誰もが体感できる事業を今後も、展開していきます。

第４回　児童生徒の自殺を防ぐ
～誰一人取り残さない生徒指導に向けて～

県立総合教育センター　指導相談担当　主任指導主事　中川（なかがわ）　こずえ

１　はじめに

生徒指導上、最も重要なことは児童生徒の命を守ることである。

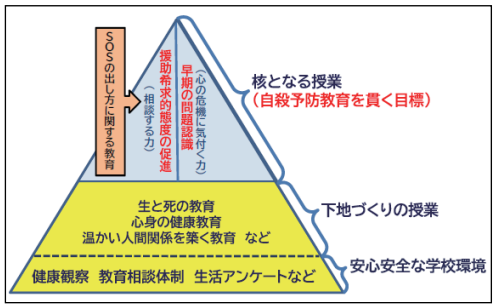
「令和４年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」によると、全国公立小・中・高等学校の児童生徒の自殺者数は 411 人である。埼玉県の同調査結果では 18 人となっており、心配な状況が続く。最終回では、児童生徒が自ら命を絶つまでに追い込まれることを防ぐために、周囲の大人がすべきことを考えていく。

２　自殺予防教育とは

「自殺」について、改訂された生徒指導提要では章立てされ 20 頁にわたり記載されている。平成 28 年に「自殺対策基本法」、同 29 年に「自殺総合対策大綱」が改正された。その改正を受け、様々な困難やストレスへの対処方法を身に付けるための教育（SOS の出し方に関する教育）等、学校が自殺予防教育に取り組むことが努力義務となった。

一般に、自殺予防は、未然に防ぐための日常の相談活動や自殺予防教育などの「予防活動」（プリベンション）、自殺の危険にいち早く気付き対処する「危機介入」（インターベンション）、自殺が起きてしまったときの「事後対応」（ポストベンション）の三つの段階に分けられる。自殺予防教育の目標と学習内容については、SOS の出し方に関する教育の位置付けの整理等の過程を得て、概念図（図）が示されている。

実施する上では、事前の教職員間や保護者等との合意形成、児童生徒の状況の把握とリスクの高い児童生徒への配慮、心の危機を訴えたときのフォローアップ等、校内体制を整備する必要がある。



【図　SOS の出し方に関する教育を含む自殺予防教育の構造】

３　SOS に気付き、受け止める

自殺によって亡くなった児童生徒の身近な大人は、自殺の危機が迫っているとは捉えていなかったケースが多くある。実際には、心の危機に直面していても SOS を発信できない児童生徒がおり、その中から自殺者が出ている現状がある。ささいな変化に気付き、声なき声を拾うためには「児童生徒理解」が肝であり、日頃のきめ細かな観察が重要である。さらには、つらい気持ちを話したいのに話しづらい雰囲気を感じさせてしまったり、勇気を出して SOS を出したときの対応が冷たかったりしたら、二度と相談してはくれない。自殺に至るまでには、日常の困りごとが解消されることなく積み重なり、最終的に心理的視野が狭まり「死ぬしかない」となる。そのため、児童生徒が日々の困りごとを相談できる環境にあることが重要である。これは、いじめや不登校等全ての生徒指導上の諸課題の未然防止にも通ずる。

４　心の危機に気付いたら

児童生徒から「死にたい」等の発言があったら、まずは丁寧に話を聴き「あなたを心配している」ことを伝えてほしい。参考になるのは TALK の原則（自殺の危機に気付いたときの対処法）である。その上で、管理職や養護教諭等と連携し「死にたい気持ち」について尋ね、自殺のリスクの高さを把握する必要がある。SOS を出せない児童生徒には尋ねない限り分からず、尋ねることで自殺を促してしまうというエビデンスはない。具体的に計画を考えたり準備したりしているほどリスクが高いことになる。管理職や校内のキーパーソンとなる教職員を中心に、保護者や関係機関と連携して支援に当たるとともに、家族やキーパーソンを支える体制をとることが求められる。

５　誰一人取り残さない生徒指導に向けて

自殺やいじめ、不登校等の諸課題は、それぞれ独立して起こっているわけではない。日々の発達支持的生徒指導で未然に防ぎ、子供が抱える困難を早期発見、対応することが大切である。子供への支援は何が正解かが難しく、答えも一つではない。対応に迷うことも多いと思うが、効果的だったときは子供との距離を近づけ、そうでないときは離れていく。諦めずに、子供の中にある答えを探し続ける教職員であってほしい。

【参考】
「教師が知っておきたい子どもの自殺予防」文部科学省（平成 21 年）
「子供に伝えたい自殺予防」文部科学省（平成 26 年）
「令和３年児童生徒の自殺予防に関する調査研究協力者会議審議のまとめ」
　文部科学省（令和３年６月）
「児童生徒の『死にたい』という言葉を聞いたら」県教育局リーフレット

教育用語解説「農福連携等」

農福連携とは、農業と福祉（障害者）の連携という狭い意味で捉えがちだが、「農」は、農林水産業、六次産業などがあり、「福」は、障害者だけではなく、高齢者、生活困窮者など、社会的に生きづらさがある多様な人々が含有される。それら様々な人が、農業分野で活躍することを通じ、自信や生きがいを持って社会参画を実現していく取組である。

農福連携に取り組むことで、障害者等の就労や生きがいづくりの「場」を生み出すだけでなく、農業の担い手不足や高齢化が進む農業分野において、新たな働き手の確保につながると考えられている。

平成三〇年六月に発信された農福連携等推進ビジョンでは、農福連携を、「農業分野における障害者の活躍促進の取組だけではなく、ユニバーサルな取組として、様々な産業に分野を広げるとともに、高齢者、生活困窮者、ひきこもりの状態にある方などの就労・社会参画支援、犯罪・非行をした者の立ち直り支援等にも対象を広げ、捉え直すことも重要である。」と明記された。その後多くの場面で「農福連携」から「農福連携等」と表現されるようになり、農と福のもつ意味の広がりが生み出す新たな価値への期待が込められている。

現在、国、地方公共団体、関係団体等や、経済界、消費者など、様々な関係者を巻き込んで、農福連携等を応援する取組として、「農福連携等応援コンソーシアム」が立ち上がった。五百以上の企業、団体が賛同し、その取組を表現したブランドが「ノウフク」である。ノウフクは、多様な人が関わり合うプラットフォームであり、新たなマーケットを生み出す経済活動でもある。

全ての人にとって、安心安全な食や生産物やその作り手とつながること、地域コミュニティと結びつくこと、豊かさの意味を再構築することなど、持続可能な環境や社会をつくり支える力になるものである。

総合教育センター江南支所は、「ノウフク」の賛助会員として、特別支援学校で学ぶ生徒の障害者特性を考慮し、合理的配慮を示した「農業分野の学習プログラム」を作成した。このプログラムを作業学習等で利用することで、農業学習の内容を向上させ、生徒の農業分野への興味・関心を高めて、農業分野の就労機会の充実に結びつけようと考えている。

プログラムは、こちらからも読み取れます

県立総合教育センター
農業教育・環境教育推進担当

電話・メール相談の現場から
～保護者支援について～

近年、児童生徒の家庭状況が多様化し、学校や家庭の役割の変化を実感している教員も少なくないだろう。「よい子の電話教育相談」での保護者からの主訴は、子供の不登校や進路、昼夜逆転などの症状や学校生活に関することなどであるが、保護者が何らかの事情で余裕をもって子供に対応できていないことが関係していると思われるものも中にはある。以下は、電話相談に寄せられた保護者からの主訴の一部である。

「登校渋りがあり親が付き添って何とか登校しているが、母が仕事を休めないため、子供を休ませざるを得なかった。」

「通信制高校への転校を検討したいが、私立は経済的に難しい。今の学校に通うのも難しく、環境を変えてあげられない。」

「母一人子一人。母には持病があるが、親戚は皆遠方なので、いざというときに助けてくれる人はいない。身近に相談できる人もいない。」

「へとへとになって仕事から帰宅すると家中散乱していて子供を大声で怒鳴ってしまった。」

主訴からうかがえる保護者自身の余裕のなさは、「時間的」「経済的」なものに加え、「精神的」「肉体的」な余裕のなさとも大きく関連している。相乗的に悪循環になってしまったり、更には親子関係に悪影響を与えたりしていることも懸念される。

厚生労働省の二〇二二年の国民生活基礎調査によると、児童のいる世帯の母親の就労率は、二〇〇四年の五六・七％から二〇二二年には七五・七％と増加している。また、生活意識が「大変苦しい」「苦しい」と回答した世帯は、児童生徒のいる世帯で五四・七％、母子世帯では七五・二％であり、半数以上の世帯が「大変苦しい」もしくは「苦しい」を選択している。保護者の余裕のなさを反映する数値の一つとも言えるだろう。

では、電話教育相談の需要が絶えないのはなぜだろうか。電話教育相談では、相談員は相談者からの話にじっくりと耳を傾け受容し、話を整理したり解決策を提案したりする。相談終盤には相談者の声が明るくなることも多く、「〇〇してみます」という意思表明と礼で終話することが多い。一回完結の間接的支援のため、子供に関する困りごとはもちろん、保護者の時間的、経済的、肉体的な余裕のなさの根本的な解決には至らない。しかし、相談員に話を聞いてもらえたり受けとめてもらえたりしたことが、想像以上に相談者の精神的な安定につながるとともに、この対応から学べることもある。

例えば、児童生徒が抱える困難や課題に対応する際には、家庭の状態を想像したり保護者の立場に立って考えたりすることができるであろう。また、保護者との面談や電話の際には、保護者を労い、保護者の話に耳を傾けたり、共感したりすることもできるであろう。教員一人一人の少しの思いやりのある言動が保護者に寄り添うことにつながり、保護者の精神的な余裕や安定に寄与する。児童生徒の家庭環境そのものに影響を与える可能性さえある。

家庭は児童生徒の健やかな育ちの基盤であり、全ての教育の出発点である。業務に追われる中ではあるが、児童生徒の健全な成長や発達のために、工夫できることはまだまだありそうである。

県立総合教育センター
指導相談担当

私の原点

久喜市立東鷲宮小学校
校長　獨古（どっこ）　芳雄（よしお）

「先生は、僕たちの気持ちを理解し、一緒に泣いてくれました…。先生の心は、いつも僕たちと一緒に戦ってくれていたのです。」これは、私の初任校の離任式で、生徒から贈られた手紙の一文。今でも決して忘れられない言葉だ。

私は、蓮田市の中学校で、欠員補充の臨時的任用教員として教職人生のスタートをきった。一・二年生の授業と副担任、そしてサッカー部の監督を任された。ここで一生忘れられないたくさんの素敵な子供たちと出会うことができた。

この手紙を読んでくれたのは、サッカー部の「タカシ」。実力ある上級生の中に入って、下級生ながら守護神としてゴールキーパーを任せた生徒だった。彼は、とてもストイックな生徒で、練習後は、「先生、ボールを蹴ってください！」といつも私をペナルティーキック練習に誘ってきた。自分が納得いくまで、何度も強く厳しいシュートを要求してくる。時には、暗くなってボールが見えにくくなっても練習し続けたこともある。私もとことん付き合った。そして満足すると、深々と頭を下げ丁寧に礼を言い、鉛入りのサポーターを足首に巻いて走って下校していくのが彼のルーティンだった。

私は、サッカーは好きだったが経験はなく、当初、部員たちは私の言うことをあまり聞いてくれなかった。部員のほとんどが少年サッカーの経験者だったこともあり、未経験の私から教わることは何も無い、そのような生意気な態度で接してきた。その態度に私は、悔しいのと生徒たちに申し訳ない気持ちとが入り混じって複雑な心境で毎日を過ごしていたのを思い出す。しかし、いつまでもそのような気持ちではいられない。私もできる限りの努力をした。当時のサッカー強豪校へ練習を見学に行ったり、名の通った指導者から指導法を学んだり、審判員のライセンスを取得したり。サッカー経験のある親友に、練習メニューの助言を受けたり、コーチとして指導に来てもらったりしたこともある。私も部員たちに負けてはいられない。

【子供たちから贈られた宝物】

部員たちには一切何も言わず、自己研鑽に取り組む日々を続けていると、だんだん部員たちの私に対する態度が変わってきた。そしていつの間にか、彼らの心と私の心の絆ができてきた。そうなると、私は、部員たちと過ごす時間が楽しくて楽しくてたまらなくなった。今では絶対に許されないが、年末は大晦日まで練習に明け暮れ、昼に年越しそばを一緒に食べ、年明けには初詣も部員と一緒に近くの神社まで出かけて行った。勿論、願掛けは「県大会出場」だった。当然のことながら、大会で試合に勝てば歓喜絶叫！負ければ悔し涙…。負けた試合後、悔しくてたまらなくて何も言えない私の代わりに、キャプテンが「みんな、次、頑張ろうぜ！」と声をかけてくれたこともある。私より、子供たちの方がうわてだった。今、こうして思い出すと大人げなかった自分が恥ずかしい。

この時、生徒たちから学んだことがたくさんある。その一つは、教師でも大人であっても感情を抑えこまなくてもいい場面があるということ。特に、つい自然に出てきてしまう涙。誰もが、人前で涙など見せたくはない。平静でいたいものだ。しかし、耐え忍んで我慢してもつい溢れ出てしまう感情は、どうにもならない。離任式でタカシからもらった言葉でそう感じた。また、子供たちと共に過ごした輝く日々から強く実感している。

これらの出会いや思い出が、子供たちとともに教育の世界で職（人生）を全うすると心に決めた私の原点だ。

それから三十数年。子供たち、諸先輩方、教職員、保護者や地域の方々からたくさんのことを教わってきた。そして、愛おしい子供たちと出会い、たくさんの喜びや感動を味わわせてもらい現在に至っている。教職に就いて本当に幸せだったとつくづく思っている。

子供たち、保護者や地域の方々から初めて「獨古先生」と声をかけてもらえた時の嬉しさや少々の気恥ずかしさ、そして覚悟した重大な責任。教職のゴールが見え始めてきてしまった今。あらためてこの想いや決意を忘れることなく、これからの日々も子供たちの幸福のために、職員たちとともに精一杯努力していきたい。今、心に決めていることがある。生まれ変わっても教職に就くということ。私の原点は変わらない。

これまでに出会った全ての子供たち、お世話になった全ての関係の方々に心から感謝したい。

最後に、これからの埼玉教育を担い続ける教職員の方々へ。「それぞれの原点を忘れず、子供たちの輝かしい未来のために楽しみながら職責を全うしてください。」

〈プロフィール〉
平成四年度から白岡市立小学校教諭、久喜市立小学校教諭（二校）、久喜市教育委員会指導主事、東部教育事務所管理主事、越谷市立小学校教頭、久喜市立小林小学校長、久喜市立上内小学校長を経て、令和四年度から現職。

教職員相談道しるべ

「授業改善」「働き方改革」必要？

小学校に勤務して二十数年目になります。三学級編制の学年主任を務めています。他の二学級の担任は二十代と三十代です。

学校では、児童一人につき一台ずつタブレットが配備され、ＩＣＴを活用した「主体的・対話的で深い学び」を実践するよう指導されています。私は機械操作が苦手で、タブレットをうまく活用することができません。これまで二十年間以上、タブレットがなくても子供たちと楽しく授業をしてきました。隣のクラスの担任二人はタブレットをどんどん使って授業をしています。

また、働き方改革で、管理職からは毎日のように早く帰るよう言われますが、教材研究や授業準備など、子供たちのためにやっていることも改善しなければならないのでしょうか。時代の流れで仕方ないことは分かっていますが「授業改善」「働き方改革」という言葉ばかり言われ続けて、疲れてしまっています。

技術もなく疲弊している私が、学年主任を続けていてもいいのでしょうか。

（小学校　Ｗ）

捉えようで疲弊感の解消へ

県立総合教育センター　教職員研修担当
専門指導員　戸坂　和明

働き方改革に加えてＩＣＴを活用した授業改善が、教育現場でしきりに叫ばれていますが、この動きには一つのゴールがあるのではないでしょうか。学校における働き方改革、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善、そして不祥事の根絶等を含め、全ては教育の質の向上を目指すものです。一つ一つの取組が教職員の負担増になると捉えがちですが、それぞれを着実にバランスよく推進していくことが、風通しのよい職場づくり、仕事の効率向上（負担軽減）、授業力の向上に結び付いていくと捉えてみてはどうでしょう。あなたの学校にもきっとよき同僚や上司がいることでしょう。仕事は常にチームで、困ったときはすぐにヘルプの声を上げながら、職員同士の助け合いや学び合いを学年主任の立場から推進してみてはいかがですか。

編集後記

本誌「埼玉教育」第八二四号をここに発行することができ、執筆者様を始め、関係する全ての皆様に心から感謝申し上げる。

さて、本誌は今年度、発刊から七十五年目を迎え、デジタル版としてリニューアルした。昨年度まで発行していた冊子版は、これまで多くの方々に手に取っていただき、お読みいただいていたことと思う。

担当者は、執筆者様と何度かやり取りさせていただきながら意図をくみ取り、関係各所等と相談しながら作業を進めていく。これを大事にして繰り返し、これまでに全八二三号を発行してきた。今年度、デジタル版となり読者へ届く形は変わったが、これまでの担当者が大事にしてきたものは継承していきたいと思い、本業務に携わってきた。

本誌「埼玉教育」の役割は、県内の先生方の取組事例や活躍の様子を積極的に発信したり、先生方に役立つ最新情報を掲載したりすることであると考える。従って、私たち担当者は、今後も魅力的な「埼玉教育」を作っていかなければならない。そのために、教育に携わる各界の専門家の研究や実践を広く紹介していきたい。担当者として、アンテナを高くし、国や県の動向など最新の情報収集に努めていきたい。そして、お読みいただく皆様に、それぞれの教育情報に興味をもっていただくことが大切である。

今年度は百名を超える方に貴重な実践や取組について御執筆いただいた。改めて感謝したい。

是非、今後も「埼玉教育」をたくさんの場で御活用いただき、愛読していただければ幸いである。

県立総合教育センター
企画調整「埼玉教育」担当

令和５年度　第 58 回
郷土を描く児童生徒美術展
埼玉県知事賞　受賞作品

わーい！　かまきり！

小鹿野町立長若小学校　第１学年　日野谷（ひのや）　祐（たすく）

※学年は出品当時です。

青空とふみきり

行田市立長野中学校　第３学年　瀧澤（たきざわ）　有加（ゆうか）

※学年は出品当時です。

令和５年度　第 58 回
郷土を描く児童生徒美術展
埼玉県知事賞　受賞作品

奇跡

北本市立宮内中学校　第３学年　保坂（ほさか）　慧亜（えあ）

※学年は出品当時です。

彩の国
埼玉県

埼玉教育　第 77 巻　第４号（第 824 号）

編集・発行　埼玉県立総合教育センター
代　　表　所長　田中　洋安
〒 361-0021　埼玉県行田市富士見町 2-24

レイアウト　有限会社　マックスアーリー　熊谷市柿沼 841-5